

クソトカゲのヒーロー アカデミア

丑こく参り

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、俺は転生した。

それはいい。けどさ……なんでクソトカゲなの？

目次

転生したけどさ、なんでクソトカゲなのかな？もう少しマシなやつ無かったの？	1
火事だー！ま、クソトカゲだから問題ナツシング！	5
八木俊典	9
人食い闇	12
めんどくせー！何かって？そりゃあこの撤退だよ！	15
さーて、どうやって助けよう。……ま、俺が助けに行くしかなないよな。	20
黒スーツってさ……夏場とか熱くないの	
？	25
結局、Keter同士は殺しあうしかないんだよなー。だって、Keterだもん	29
覚醒 SCP076	33
暴走は突然に。てか、暴走の条件って意外と簡単過ぎない？	37
暴走を止めるには心の安心感が必要なんだよ、OK？	42
中学にはヤバい奴がいることって多いよね？でも、ここほどではないはず！	46
上鳴小僧と出会ったけど、流石ヒーロー	

の卵だ。俺らの本質を本能的に理解出来

る奴は中々いない

52

試験の前の説明って面倒だよ。試験も

面倒だし、ホントに嫌になるよ

57

合格通知って滅茶苦茶ドキドキするよね

?けど、俺にとつては緋鳥の個性暴走の

ほうがドキドキするよ

60

女は怖い、めっちゃ怖い。何せ、敵対した

ら男に勝ち目はないからな。

66

個性把握テスト 上。全く、面倒だよ。

面倒すぎて全裸になってしまうくらい

70

個性把握テスト 下。さつさと先生と戦

いたい。という訳で頑張りますか

76

人間VSクソトカゲ、そのバトルの行方

は!?!…て、もう投稿してる時点で分

かってるか

80

戦闘訓練か。負けるつもりは全くない

ぜ

86

基本的に相手の隙を突くって方法は自分

の隙を理解している敵には通じないよね

?

89

閑話 タルタロスの囚人

93

悪夢! 刑務所から集団脱獄。しかも、脱

獄したのは最悪な奴等だ!

97

脱獄した奴等はSCPシリーズだよな？

なら、こつちも用意しないと！ — 102

暴走って怖いよねー！だって、俺は見て

いるだけだし — 106

暴走状態は解除するのは簡単、はつきり

分かるんだね！ — 114

身体はホット、心はクール！ — 119

未来に干渉する個性って……はつきり

言つて、チート過ぎない？ — 123

事情聴取つて必要だけどされている人に

とつて結構負担大きいよね — 128

疑問提起、幾らなんでも反則レベルの相

手に何も考えずに突っ込むのは無謀！

ヴィランって全部が全部、悪人という訳

ではない。当たり前的事だよな — 136

天才って言うのは産まれてからずっと運

命に愛されている存在だと、俺は言いた

い — 140

運命に嫌われているとき……本当に貧乏

くじばかり引くことになるよ。ヤレヤレ

だぜ — 144

SCPの奴ら、耐久力化け物かよ!?人の

事を言えないけど！ — 148

宣戦布告は相手を考えよう。つて言つて

も、敵も対人特化だけど — 152

転生したけどさ、なんでクソトカゲなのかな？もう少しマシなやつ無かったの？

「……………」

俺はなんか真つ白な世界で起きる。

えーつと、何で俺がここにいるんだ？てか、ここどこ？俺は確かに病死したはずなんだけどな……ホントにどゆこと？

『カードを選んでください。』

突如脳内に言葉が響き、辺りの地面に紙が大量におかれる。

カードを選べ、だあ？やれそうなことはないし、仕方ない、選ぶか。どれにーしーよーおーかーなーつと。

『これだ！』

俺は選んだカードを裏返して中身を見る

『僕のヒーローアカデミア』

あー、緑谷とかが活躍する王道系のバトルマンガだねー。てか、これになんの意味があるの？

『カードを選んでください。』

カードが消えて新しいカードが出される。

全く、カードを選ぶばかりでイラツてくるな。けど、それでもやることないしやるかどーれーにーしーよーおーかーなーつと。

『SCP (K e t e r)』

ぶふお!?

え、SCP、しかもけ、ケテルつて……! K e t e rはほぼ人間を絶対殺す殺意ましましの怪物じゃねえか!!返品をようきゅ……う……。

|| || || || || || ||

「おぎやー!」

「奥さん、産まれましたたよー!」

……ここは?けど、この感覚は一体……。

いや、そうじゃねえ!!さっきのやつつてまさか転生!?俺、転生しちやたの!?!
となると、俺の個性はなんだよ!!

「これは………蜥蜴?」

「異形系のようにですね、奥さん。」

あ、オワタ／＼(o^o)／＼

蜥蜴、SCPと来て思い当たるのは一体しかない。

SCP682……不死身の爬虫類。みんな大好きクソトカゲである。

あいつはほぼ最強のSCPといっても過言ではない能力を持つているけどさ……これ、絶対に面倒ごとに巻き込まれることが確約されたようなもんだと思うのだが……。

取りあえず、こう言おう。

くたばれクソガミ!!

|||||||

あーくそ、まだ体が動かないし、少し解説するか。

SCP682 不死身の爬虫類。 毎度毎度『財団』に迷惑をかけているK e t e r k
ラスのSCPの代表例だ。

能力は無茶苦茶な不死性と生命力、強靱すぎる身体能力や反射神経であまりにも凄まじい被害から半径五十キロ圏内では都市開発が行われていないほどだ。

何をしたかつて？ 脱走だよ、脱走。 しかも、その度に財団職員をかなりの数を殺しているもんだから塩酸入りのケースに突っ込まれてる（その中でも生きてる。 不死身過ぎないか？）

しかも、人間の知能に匹敵する知性を有しているから学習すらする。 つまり、一度食らった攻撃は全く通用しないのだ。

4 転生したけどさ、なんでクソトカゲなのかな?もう少しマシなやつ無かったの?

結論を言おう。
くたばれクソトカゲ

火事だー！ま、クソトカゲだから問題ナツシング！

俺がクソトカゲに転生して早四年が過ぎた。

クソトカゲに転生して分かったけど俺……名前は『ふじた藤多 はしゅう葉秋』はあのようなクソトカゲじゃないらしい。

クソトカゲは成長速度が異常に早いけど俺は成長速度は普通の人間と変わりがない。どうやら、クソトカゲと人間を足して二で割った感じだ。見た目も顔はあのクソトカゲの顔ではなく、人の顔で頬の部分まで鱗があり、背中・腰・腕・脚はクソトカゲの物だが腹・胸は人の物だ。

最も、身体能力、反射神経、再生・回復力とかは変わらない。人のように見える所も中身はクソトカゲの物だ。

因みに親は……まあ、普通の人間だ。間違ってもシャイガイやらきらいきらい星、人喰い闇、無題やらのSCPの能力を有しているわけではない。

「あ、何をしておりますの！向こうでドツジボールをしましょうよ！」

「うっさいな、八百万。こっちのほうが楽しいんだよ。」

「いいえ！みんなで動くことはして当たり前のことです！」

俺が幼稚園の木陰で昼寝していると黒髪のパニーテールの女子が怒ってきた。

名前は八百万 百。俺と同じ年で個性は『創造』。体内の資質を様々な物に変換できる個性だ。

……おれはこいつが嫌いだ。感覚的に嫌いだ。本能が嫌っている、と言ったほうが正しい。

「そういえば、今日、親とちよつと出かけるんだ。」

「へー、どこにいくのですか?」

「ちよつとデパートに。」

|||||

「どうしてこうなった。」

俺は八割がた消し飛んだ体をよこにしながら起きる。

辺りは火の海で囲まれ、喉が痛い。

なんでも、ヴィランが爆発物をこのデパートに仕掛けたらしくてその一つが俺や家族がいた場所の近くにも仕掛けられていて起爆したらしい。

親は爆発のエネルギーで死んでいて俺も今全速力で回復・再生させているところだ。

「……あ。」

立ち上がったところで天井が崩れ、そのまま崩落する。

幾らなんでも避けれずにそのまま飲み込まれる。

まあ、頑張ればよければと思うけど……あ、この音はオワタ／＼（〇〇）／。

「二段構えは反則だろうがああああああああああああ！」

床が碎かれ、俺は絶叫しながら落ちる。

|||||||

うーん……あ、俺、生きてる。

ま、生きているか。何せ、俺はクソトカゲなんだしな。にしても、なんでクソトカゲなんだろうか。クソトカゲ以外にも蜥蜴っぽいSCPがいるはずだけど……。

「おい、ここにいたぞー！」

「ひでえ……全身丸焦げだ。仏さんをさっさと出そう。」

お、助けがきたみたいだ。てか、死んでいないのだが。

「あの一、早く背中に乗ってるコンクリ退かしてくれない？」

「い、生きてる!?!」

俺の声を聞いた消防隊は驚きの声をあげた。

俺も生きてるのが不思議だと思っけどさー、俺の個性はクソトカゲだし、仕方ない
仕方ない。

「ど、退かしたよ……。」

「よっと。」

上に乗っていたコンクリを全速力で取り除いてもらい、俺は起き上がって髪の毛からビリビリっつと脱皮する。

これ、大きくなることはないし小さくなることもないけど一応できるんだよな。

「ひ、ひえ……。」

「それじゃ、ばいばーい。」

腰を抜かした作業員に手を振って俺は歩いていった。

さーで、これからどうしよう

八木俊典

「……君が藤多 葉秋君かい？」

「ん？誰っすか？」

両親がいなくなり、親戚がいらないから施設に入って数週間、俺の引き取り手が見つかったらしい。深夜、個室で面談形式でご対面している。

ふーむ、どこかで見たことがあるような無いような……。ヒーローか何かか？でも、こんな姿のヒーロー見たこと無いぞ。

「私の名前かい？私は八木 俊典。『オールマイトヒーロー事務所』でオールマイトのマネージャーを勤めている者だ。」

「へー、ま、引き取って貰えるのなら文句は言わないけどさ……。気配でわかつちやうんだよね、オールマイト。」

「ッ!?な、なんのことかな？」

あ、この反応、凶星だ。

でも、何で極々一般家庭の俺をオールマイトが引き取るんだ？何かしらの事情でもあるのか？……。あーくっそ。こんな事ならヒロアカちゃんとアニメ見とけばよかった

な—!

「オールマイト、普通の人なら騙せると思うけど俺の気配察知能力を甘く見すぎ。」

「す、すまなかった……。」

「それで、何で俺を引き取ろうとしているんだ？俺は極々一般的な民間人だぞ？」

オールマイトは少し押し黙った後、口を開いた。

「君は、自分の個性をどこまで理解しているんだい？」

「えーと、俺の個性は『クソトカゲ』。身体能力、反射神経、適応力、極めて高い再生能力が特徴の個性。また生命力も極めて高く、体の八割近くが消えても生きていける。脳や心臓が潰れても回復するだろうな。……なんでそんな微妙そうな顔をしているんだ？」

「い、いや何で個性の名前が『クソトカゲ』なんだい？完全に悪口じゃないか。」

「別にいいだろう？」

だってクソトカゲはクソトカゲだし。それ以外でつけるのなら『SCP682』とか『不死身の爬虫類』とかしかないんだぞ？

……『不死身の爬虫類』の方がよかったか。

「ま、まあそれは置いといて……君のような余りにも反則染みた個性は多くのヴィランが欲している可能性が高い。君の個性ほど強力な個性は知らないからね、君の身柄を保

護するのなら私が引き取りたい、と思っただけさ。H A H A H A H A !」

「……まあ、別にいいけどさ……。なーんか、こつちに真つ黒い物が飛んで来ているのだけど……。」

「えっ?」

キヤー!あれつて『人食い闇』じゃねえか!?俺と同じK e t e r のSCPの!あれもこつちにいるのかよ!?

「……やあ。」

「あ、お帰り願います『人食い闇』。」

「連れないねえ……。」

「な、誰だい君は!」

「そこにいるやつと同じだよ。普通じゃない個性の使い手。まあ、俺の個性はそいつと違つて発動系だけだよ。」

突如、物の影から黒い服を着た俺と同一年の少年が現れた。

確か、暗いところだったらどこにでも行けるからな、『人食い闇』は。

「それで、何の用だ?」

「君を……僕たちのチームにいれたいのさ。」

人食い闇

「チームねえ……おおよそ、俺と同じようなSCPシリーズの個性か？」

「ええ。……ああ、そちらの八木さんが保護してもらっても構いませんよ。」

要するに、俺と同じSCPたちを仲間にしたいのか。

……悪くはない。

「いいだろう。けど、犯罪行為に手を出すつもりはない。」

「意外ですね。あなたは不死身の爬虫類、生きとし生ける物を憎む最悪のKeterではないですか。そんなあなたが人を守ることを選択するとは。」

「俺はクソトカゲが主人格ではないからな。人を守るために行動するのは当然だろ？ お前だって正体不明の物質で出来ている癖に。」

「ええ。……では、もう一つ要件を言いましたよ。」

もう一つの……要件？

「この世界には私やあなたのようなSCPの力を持つ存在が生まれはじめてきます。となると、必然的にSCP能力者の奪い合いが始まります。現状、私が見つけ、チームに入れたのはKeterシリーズばかりです。」

うわー、殺意まじりだけしかいないのかよー。safeは？Euclidとかいなののかよー。

「Keterは能力が絶大。世界を滅ぼすことすら容易に引き起こす。逆に言えば見つけやすいですよ。あなたに頼みたいのはsafe、Euclidの確保です。」

「いいぜ。……見つけたらな」

「では、私はこれで。」

再び『人食い闇』は影の中に消えていく。

変わったやつだったが……まあ、できたらでしか動かないが。

「それで、俺の引き取りですか？まあ、頼みますよ。」

「いや、さっきの会話について深く知りたいな!？」

「はあ、わかりました。話しますか。……俺の個性の本当の名前は『不死身の爬虫類』とある異界に存在すると言われる生きとし生ける物を憎悪する太古の超生物です。」

「なっ……!?!そんなのが個性だったのか!？」

「ええ。そこにいる人の常識を遥かに越える超常、それがSCP。管理、收容、保護の英語の頭文字からとられたものです。これらには『管理していれば安全な』Safe『管理されていても突然動きだす』Euclid、そして『収用・管理が困難、又は脱走した場合大がかりな作業を必要とする』Keter。これらがあります」

「なんと……個性だ……。」

「まあ、俺の個性はK e t e rの中で最も知られているものですけどね。」

「……………」

「それでは、一つ聞きます……思ったのですが、貴方のようなナンバーワンヒーローが俺を保護することはない。誰が本当の引き取り手なんだ？」

「あ、ああ。確か名前は……。」

「八百万さんだ。」

……………はい？

めんどくせー！何かって？そりやあこの撤退だよ！

「はあ……。」

俺は憂鬱そうにため息をつきながらアホみたいにデカイ門の前に立つ。

これ、何処にインターホンがあるのか分からないんだよ……いや、それっぽいものはあるけど触れたら粉碎しそうだし……。

「あれ？葉秋さん？」

「久しぶり、八百万。」

ちやうど幼稚園から戻ってきた八百万と合流する。

……こいつの家に引き取られるなんて夢にも思っていなかったな……。

「その……、ご両親についてはお悔やみます。」

「あー、その辺は取りあえずいいよ。……一応、お前の家に引き取られることになるなんて予想出来なかったし。」

「では、中に入りましょう！」

そう言つて八百万……いや、百に連れて行かれて家の中に入る。

うお……外から見たときにも思ったけど、やっぱり豪邸だな。圧倒されるよ。

けど、前の爆発事件の時に若干トラウマになったのか……大きな建物があまり好きではなくなっただよな……。

結果的に、百に対する嫌悪感は自然と薄れているようだけど。

|||||

「そう言えば、一つお聞きしたいのですが。」

「……何だ?」

俺に宛がわれた無駄に豪華な部屋で右手で据え置き型のパソコンを運び、左手でクローゼットを運びこんでいる時に、百は話しかけてきた。

全く、一体なんなんだ?

「葉秋さんの個性、一体なんですか?」

「……蜥蜴だけ。」

「ですが、貴方のその筋力は一体なんですか?」

「……………あつ。」

しまった。やらかした。

このクソトカゲ、再生能力も凄まじいけど身体能力も凄かったこと、すっかり忘れてた……………!

「あー、俺の個性についてはお前の両親にも嘘をつく予定だったけど……………絶対に言うな

「よっ。」

「えっ……？わ、分かりました。」

こいつ、本当に歳の割に頭が回るな。

それなりに助かるけど。

「俺の個性は『クソトカゲ』って言うのが名前だ。」

「……その名前、酷すぎませんか？ただの罵倒なのではないのでしょうか？」

解せぬ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「……す、凄い個性ですね……。」

「凄さの反面、巧く力を加減しないといけないのが難点だけど。」

俺と百は別の場所に預けられた俺の道具を取りに車に乗って走っている。

車、とは言ったものの断じて普通の車ではない。高級車である。

さすが、お金持ち。

「けど、それならヒーローにもなれるのではないのでしょうか？」

「ヒーローか……俺には向かないかな。」

「……??？」

前の爆発事件で俺の心が少し変わったのか、クソトカゲの精神が入り込んだのか分か

らないけど、狂暴性が増した気がする。

そんなのがヒーローになってはならないと思うけど。

「ん……? ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああ!!」

「っ?!百、危ない!」

「えっ!?!」

突如、運転手のおっさんのハンドリングが失敗し、電柱にぶつかる。

俺は百の腹を抱えて扉を尾で吹き飛ばして百を庇いながら転がる。

くそ、一体なんなんだ!?

「に、にげ、逃げて……! た、たず、助けて……!」

道路の中心で泣きながら歩く少女に俺は目を向ける。

赤い髪をボサボサにし、簡素な手術服のような服には血痕が残っていて、それが今も
広がり続けている。また、身体の至るところから血が流れ、地面に血痕を残していく。

少女の腕は赤い翼で、まるでハービーのようで、辺りには文字の羅列が並び、まるで

赤い赤い

(あつぶねえ!!)

俺は一気に思考をシャットダウンし、百の目を隠しながら全速力で走り去る。

おいおい……！俺のようなK e t e rクラスがこっちにいるのはヤバいけどさ……
あんなのもいるのかよ……！

「えっ!?!えっ!?!葉秋さん、一体何を!?!」

「いいから黙ってる！それと手をどけようとするな！あれを目にしたら死ぬぞ！」

「えっ!?!」

手をどけようとしている百を脅して俺は全速力ではしる。

あれは……間違いはない。日本生まれのSCPであり、クソトカゲの收容違反よりも遙かに大きな收容違反を侵し、それ故に最悪の收容違反と言われたSCP……！あまりにも被害が大きすぎてK e t e rの枠を越えたとてクラスすら与えられていないSCP
……！

SCP444……『認識の鳥』だ……！

さーて、どうやって助けよう。……ま、俺が助けに行くしかないよな。

「はあー、はあー……ここまでこれば問題ないだろう……。」

「は、葉秋さん……いきなりなんですか？」

警官がバリケードを張っている場所まで全速力で逃げ切り、戸惑う百をおろす。

相手は認識の鳥、正直に言つて俺以外なら相手にすらならない個性だぞ……。

さつき逃げている時に何故か幻覚・幻聴が聞こえなかった。恐らく、効きにくい相手

とかがいるか、もしくは……

いや、この話は仮定だ。それに、こんな可能性は考えたくない。

けど、あの少女はその仮定を実証してしまっているんだよな……。

「先ほど、少女の泣き声が聞こえていたのですが……。」

なるほど、まだそこまで認識を食べていなかったか……。なら、他の奴等が相手にしなければ問題ないと思うけど……。

「分からない。けど、恐らく何かしらの原因で個性が暴走したと思えない……。」

「君たち、大丈夫かい!!」

「邪魔。」

「い、ふおー！」

考え込んでいるときに割り込んできた金髪の筋肉ムキムキのマツチヨマンの変態を殴り飛ばして再び考え込む。

恐らく、あの見た目は認識の鳥ではなく、SCP020

『翼人、またはつばさびと』だろう。認識の鳥はあの文字の羅列のほうだろうし……となると、物理的な攻撃は聞くけど……。

助けを求めている奴を、見過ごせないしなー……どうしよう。

「え、ちよつ、葉秋さん!?! さっき、オールマイトを殴つてましたよ!?!」

「いや、考え事をしている人に話しかけてくる奴が悪い。てか、今回はオールマイトには無理だから。」

「それは、どういうことかな。」

オールマイトが起き上がり、スーツが良く似合う若い男がオールマイトの肩を支える。

えーと、確かサイドキックの……『サー・ナイトアイ』だったか。予知が出来るブレイン系のヒーローの。

てか、今回の事件にはいらなんだよなー。あの子は何としてでも助けたいし。

「いや、だって『認識の鳥』は認識を食べることで強くなるから普通に突っ込んでいっても幻覚やら幻聴を見させられたりして自滅するか狂死するかのどれかだよ？ パワー系のヒーローはいらないしブレイン系は更にいらぬ。てか、今はまだいいけど最悪の場合、お前たちはこの時点で死んでる。」

「君は、ヴィランについて知っているのか？」

「はあ？ んな訳ないだろ、サー・ナイトアイ。単純に起こった事象から読み取っただけだ。」

若干イラつきが抑えられていないサー・ナイトアイはずれた眼鏡をもとに戻す。

さて、助けに行こうかな……。

「あ、オールマイト。」

「な、何かな、葉秋君。」

「バリケード内に誰も入れないようにしてくれ。……あんたが追っている男と見分けがつかない。」

「なっ!? 一体それをどこで!？」

「お、凶星か。」

「しまっ……!？」

やっぱり、誰か追っているのか。

となると、そいつが『認識の鳥』に干渉する可能性も出てきた。となると、厄介を通り越して面倒だな。

「取りあえず、百を保護しておいてくれ。」

「き、君はどこにいくのかね!？」

「はあ？分かんないの？馬鹿じゃねえの、オールマイト、サー・ナイトアイ。——
人助け、だよ。」

俺はバリケードを蹴り飛ばして再び『認識の鳥』に向かって走っていく。

絶対に助けてやるよ……、このクソトカゲがな。

|| || || || || || || || || ||

「……すごい、少年だな。」

「はい、オールマイト。」

私はあの少年の行き去った道を見て心から恐ろしいものを感じた。

前に『人食い闇』を名乗る少年に一切動じることなく対応する胆力、ヒーローだろうと真実を告げる気質……そして、誰かを助けようとする心の優しさ。

彼は、ヒーローになる素質がある、そう思う。

「百ちゃん、でいいのかな。」

「は、はい!」

私の笑顔を見て百という女の子は悲しそうな顔から少し明るくなった。

「取りあえず、親御さんがくるまで私が見ましょう。……オールマイト、彼の後を追って下さい。」

「……！分かった。」

私はナイトアイに百ちゃんを預けて彼の後を追う。

彼は、私にだけ教えてくれた。

SCPと呼ばれる存在を。

そして、それは個性として存在していることを。

なら、あの男も来ているかもしれない。

——私の師匠志村菜奈を殺したあの男、
A F O が。

オール・フォー・ワン

黒スーツつてさ……夏場とか熱くないの？

「……やあ。」

「……貴方、誰？」

俺は疲れたのか座り込んでいる『認識の鳥』に話しかける。

『認識の鳥』……これは本名が分からないからつけている名前だ。

「藤多 葉秋。……一応ヒーロー志望。」

「ヒー、ロー……？なら、私から、離れて……！私の力は、人を殺してしまう……！」

「いや、俺死なないし。だって、既にお前の個性の射程範囲内に入っているし。」

「えっ……？」

「こいつ、まさか個性の特性を理解していなかったのか？」

……いや、この状況から見ても暴走していると見ていいから、恐らくは個性を把握できず精神状態ではないと見て構わない、か……。

「あなたの個性は『認識の鳥』。正確に言えばお前の回りを飛んでいる文字の羅列だな。そして、お前の体の方は『翼人、またはつばさびと』。これに関しては特に言うことはないか。」

「……………」

『認識の鳥』の発動条件は現時点では『文字を読む』と言う行動をトリガーだ。……個性、戻せるか？」

「む、無理……！やろうとしても、力が溢れてくる……！」

これは、厄介だぞ……。

相手の個性はかなりの特殊型、しかも見た感じ発動型。こんな時にアングラ系のプロヒーロー『イレイザーヘッド』がいれば凄く助かるけど……無い物ねだりはダメだな。

「焦らないで。ゆっくり、深呼吸。慎重に、慎重に……。」

「すう……はあ……。」

『認識の鳥』が冷静になってきたからか、文字の羅列が少なくなってきた。

よし、これで……っ！

「危ない……！」

「えっ!？」

全身のバネと反射神経を最大限に使って『認識の鳥』の前に立って攻撃を防ぐ。

くそっ……！今度は一体なんだ!？」

「まさか、僕の殺気を読まれるとは……君、凄いな。」

「ちっ……。なんつー殺気だよ、おっさん。……そこら辺のヒーローよりも強烈だぞ。」

ビルの上からの攻撃を何とか耐えきって上を見る。

攻撃してきたのは黒いスーツを着た二十代後半から三十代前半くらいの若い男。だが、この世界は見た目で年齢を判断出来ない。となると、実年齢はそれ以上と見て構わないだろう。

「おっさん、何者だよ。気配、重圧感、殺気、攻撃の威力……どれも、規格外だ。普通のヴィランでは、ない。」

「強個性に高度な状況判断能力……彼で脳無を作ってみても面白そうだね。君、その子と一緒に来ないかい？」

「生憎、実験台になる趣味はないからパスだ。」

「なら……死ぬ。」

指から伸びる黒く赤い線の入った触手を『認識の鳥』を抱いて守る。

ぐっ……！痛い、けど！

「あなたの個性は……効かない。」

「おや……心臓を潰した筈だけど……なるほど、再生能力もかなりのものようだね。」

「個性を鎮めたか……？」

「うん……。」

「なら……掴まってて。」

「う、うん……。」

俺は『認識の鳥』を抱えたまま全速力で走り始めた。

今の状態でぶつかり合うのは下策。取りあえず『認識の鳥』を保護してもらおうしかない！

「逃がすと思って……！」

「逃がさないぞ、オール・フォー・ワン！」

「君は……！」

前方から飛び出してきたオールマイトが黒スーツを止める。
た、助かった……！少しは時間を稼いでくれよ……！

結局、K e t e r 同士は殺しあうしかないんだよな。
だって、K e t e r だもん

「ゼーはー……ゼーはー……ここまでくればいいかな。」

バリケードを蹴り飛ばしてはいいけど……問題ないよな？てか、『認識の鳥』は気絶してるし……まあ、体の方は『翼人、またはつばさびと』だし、耐久力がなくて当然か。

「き、君！大丈夫かい!？」

「俺は問題ない。この子を頼む。なるべく精神的な負担をさせないように。でなければ……この惨劇が引き起こされるぞ。」

「この子が……！分かった、取りあえずその子を病院に運ぶから救急車の手配をよろしく。」

「わかりました!」

この絵にかいた刑事さん、信用してもいいけど……まあ、こういつたことは公的な機関に任せておいたほうが賢明か……？

でも、この子の個性はかなり危険だしな……てか、あのおっさんはどうやって『認識の鳥』を防いでいたんだ？精神防衛とか、そういつた個性なのか？

「来たよ！」

「すぐに運び込みます。」

「お兄ちゃん……！」

「……お願ひするぞ。」

『認識の鳥』を救急車に乗ってきた人に渡すと、その救急車は黒い影に飲み込まれていった。

「おいおい……もうきたのかよ。」

「やあ、『不死身の爬虫類』、それに『認識の鳥』。」

「何のようだ、『人食い闇』。俺はその子を助ける為に行動しているから邪魔しないでくれ。」

「分かっているさ。けど、君はその子の危険性を理解しているのかい？」

「……ああ？」

危険性？そんなの、認識の鳥の幻覚だろうが。

「僕は二つのSCPの個性を持っていてね。片方は『人食い闇』だけど……もう一つはSCP990『ドリームマン』。未来予知系のSCPさ。」

「ちッ、また面倒な……！」

「おいおい……SCP990『ドリームマン』といえば世界の終焉なんかを予知するK

eterクラスのSCPじゃねえか……！

決めた。こいつとは……この子を守るためにも戦うしかない！

「さて、どうする？ その子を助ける為に僕と協力するか……先生のために、世界のために死ぬか。」

「先生……あの男か……！」

おっさんは俺らを実験台にしようとしていた。『人食い闇』が『認識の鳥』を確保しようしているのはそれが原因か……！

となると、相手は最悪だぞ……！

「てか、なんで俺を収容しようとしなかった。」

「うーん、言われてなかったから？」

「あっそう。」

「……え？」

『人食い闇』の右腕から先は突如消し飛んだ。

まあ、俺が爪で切り裂いただけだけど。

「なっ……！」

「いきなりどうしたんだ!？」

「刑事さん、逃げてください。……ここではその子を守れない。自家用車か何かで病院

まで連れて行って下さい。」

「ッ……！分かった、ちゃんと君も助けるからね！」

刑事さんは隊員から『認識の鳥』を貰うとパトカーに連れて走って行ってしまった。てか、周りにいたやつらはどこか行ってしまったし……まあ、そっちのほうに闘い安いだろうけど。

「さて、そろそろ復活してるだろ？」

「くくっ……僕を敵に回すとどうなるか教えてやるよ……！」

「やっぱり、あんたらの仲間にならなくて正解だったな。」

回復した手と俺の拳がぶつかり合う。

さあ、勝負といこうか……！

覚醒 SCP076

「はあー！」

「甘いよー！」

俺の拳は『人食い闇』の黒い影にぶつかり、消失する。するが、一瞬で回復する。

俺の攻撃は投げつけられる『人食い闇』で防がれるし、俺は耐性ができはじめたから回復する速度がどんどん速くなっていつていつていっている。

とどのつまり……完全に拮抗してる。

「いやー、ここまででするとは。」

「一発目で殺せなかったのがダメだったな。俺の個性とお前の個性だところなることは予想できてた。」

「作戦の段階で負けていたかー。なら、これならどうだい！」

「ちっ！」

背後から凄まじい殺気を感じて跳躍、ビルに張り付く。

俺がさっきまでいた場所は黒いものに覆われて、挟られていた。

なるほどな、俺の影を伝って黒い影を投げたのか。てか、それだとまずっ！

「どうしたんだい！さっきまでの威勢の良さは！」

「ちっ……！面倒な攻撃を！」

壁面を走り、跳躍し、空間内を立体的に使うことで黒い影を回避していく。

こいつ……！なんつー個性だよ……！これだと、まともに近づくことすらできねえ
じゃねえか……！

くそっ！攻撃する際の武器さえあればなんとかな

「あ、出た。」

何故か、全速力で走っている時に大きな剣が現れた。

……え？剣？なんで出たの？イプシロン脳波？現実改編系？どういうこと？

「今だ！」

「ぐあっ!？」

やべえ！頭をとられると能力がにぶ……え？鈍って……ない？

……あ

「まさか、覚醒したというのか？人として生まれたSCPには二つのSCPの力が宿る
というけど……まさか！」

おいおい、この力ってまさか……！

「アベル!？」

俺と『人食い闇』はそれぞれ驚愕の声を表す。

SCP076、通称『アベル』。正体は石室と中にある遺体。遺体は定期的に復活して人を兎に角殺しまくるやべえやつ。『不死身の爬虫類』とは違い、再生能力があるわけではないが……一定時間すぎたら再び復活する特性がある……人型SCP最強のSCPだ……！

けど、これは僥倖……！

「ぬおらあああああああああああああ！」

「くっ……！」

俺は剣を投げ、『人食い闇』はそれを防御しようと黒い影を投げる。

よし、狙い通り！

「……『覇源』！」

「ぐほっ?!い、いつの間に……！」

「普通にはしつてきたんだよ、戯け！」

俺は『人食い闇』が剣を止めたのと同時に八連撃を腹に打ち込む。

何をしたかって? 脳にあるリミッターを解除して神経が焼き切れようと肉が切れようと全速力でダッシュして防御の瞬間、常人では反応すらできない反射神経で八回の肉を抉る爪で切り裂いたのだ。

肉体の回復能力と生物の封じ込められた力を最大限に生かした特効攻撃……それが『覇源』の正体だ。

「ぐっ……！ 貴様……！」

「よく立てるな……！」

「お前だけは……俺が、殺す！」

なら、付き合ってやるよ。最も、腹やら胸やら肩やらを抉られて回復に力を割かないといけないから俺が勝つと思うけど。

「止めておきなさい、黒霧。」

ちっ……もうきたのかよ、おっさん！

「こうなった以上、僕たちに勝ち目はない……となると、逃げるしかないよね。」

「……分かりました。」

そう言って、黒霧とおっさんはどこかに行ってしまった。

ふう……くっそ疲れた……。刑事さんが戻ってくるまで待つか……。

暴走は突然に。てか、暴走の条件つて意外と簡単過ぎない？

「君、大丈夫だったかい!?」

「ええ、まあ……死にませんし。」

「取りあえず、病院に行つて検査してもらいます!」

刑事さんの気迫に乘せられたまま、パトカーの中に乗る。

へー、パトカーの中つて意外と綺麗なんだなー。なんとなく後ろにあんパンがわんさかと詰め込んでいるのかと思つてた。

「そういえば、君の名前は?聞いていなかったけど。」

「ああ、藤多 葉秋。……一応、八百万の家に引き取られたけど……。そういえば、百は?」

「百?ああ、サー・ナイトアイが保護していた子のことか。彼女なら今病院で傷の手当てをしてもらつてるよ。」

ついでに、他のことも聞いておこい。

「あんたの名前は?」

「僕かい？僕は塚内、階級は警部補かな。」

「あの子は？」

「あの子は骨に少し亀裂があったけど元気だよ。けど、面会謝絶中だから、君は会えないよ。」

「あの子に手を出すなよ？」

「これだけの事を引き起こしたんだ、それなりの覚悟があるとは思うけど。」

なるほど、この人は『認識の鳥』が自分の意思で事件を引き起こしたと思っているのか。

……仕方ない、少し説明するか。

「あの子は、なにもしていない。やったのは個性だ。」

「……個性を操るのは人間だ。」

「生憎、あれは普通の個性じゃないからその常識は通じない。てか、あれは暴走状態だったからなんだけどな。」

「暴走？」

「何かの拍子で二つ目の個性が発動して認識災害が引き起こされたんだよ。」

「に、認識災害？それに、二つ目の個性？」

「要するに、あの子の二つ目の個性は際限なく広まる災害そのものなんだよ、理解できた

か？」

「なら、一つ目の個性は？」

「あの子の姿を見れば分かるだろ、戯け。」

「ふーむ……つまり、君はあの子の意思と関係なく事件が引き起こされた、と見ているんだね？」

「ああ。というか、それ以外に何があるんだ？」

「これくらい説明すれば、問題ないかな。」

「君に聞きたいんだけど……彼女の個性、何か知っているのかい？」

「知っている。けど、言えない。」

「認識災害が影響しているのかい？」

「ああ。この個性は『知る』ことがトリガーとしているからな。」

「なら、何で君は生きているんだい？」

「俺が不死身だから。」

「……取りあえず、あの子は私たち警察の管理下におかれると思ったほうがいいと思うよ。」

「あんた、さっきの説明で分かっていたのか？……あの子の個性のトリガーは『知る』こと。逆に言えば……能無しどもでは防ぎようがないんだよ。」

『警部補、大変です！』

お、無線が入ってきた。

声からするにかなり切羽詰まっているように聞こえ

『鳥が……赤い赤い鳥が……！』

「ふん！」

刑事さんが声を聞く寸前に無線機を剣で粉碎する。

危なかつた……！赤い赤い鳥なんて聞けば一発で殺られていたぞ……！

「は、葉秋くん!?いきなりどうしたんだい!？」

「また暴走した。今のを聞けば確実に死んでたぞ。」

「……！さっきまで安静にしていたのに一体なぜ……！」

「おい、あの子は四歳だぞ？不安になって個性が精神状態によって変化することくらい

予想できていなかったのか？」

「で、出来ていたけど……。」

「おおよそ、あの個性の起動条件は……『不安』、かな。不安を和らげないとまた暴走するぞ？それと、警察上層部に伝えておけ。……あの子を管理しようものなら……最強最悪のクソトカゲを敵に回すことになるぞ。」

「……！」

「取りあえず、もっと加速させろ。」

「わ、分かった！」

俺は刑事さんの背中を加減して蹴り飛ばしながら加速を要求する。

取りあえず早く行かないと……！被害が大きくなる前に……！

暴走を止めるには心の安心感が必要なんだよ、OK?

「着いたよ……!」

「ありがとな。あんたは下にいてくれ。射程に入ったらほぼ死ぬからそこんとこ宜しく。」

俺は刑事さんの車から降りて病院の中に入っていく。

病院内は全員がとても落ち着いている状況だった。

……なるほど、情報規制か。普通なら権利の問題になってくるけど、今回は認識災害、情報統制はいいアイデアだ。

単純に知られたくない、と言うこともありそうだけど。

「あ、葉秋さん!」

「葉秋くん、大丈夫だったかい!」

「大丈夫だ、百、八百万の親父。そうだ、八百万の親父。」

「な、なんだね……。と言うよりも親父ではなく、パパとでも呼んでもいいんだぞ……?」
「そんな恥ずかしいことを口に出せるか……。もし、引き取り手のいない子供がきたら、身元保証人になってもらえるか?」

「うーん……まあ、いいけど。一人育てるのも二人、三人育てるのも大差ないからね。」
「分かった……。少し、用が出来たから行ってくる。」

「そうだ、病室には行けないから注意してねー。」

かすり傷をおつていた百を引き取りにきた百の親父から言質をとつた後、警官が立っているエスカレーターの近くにある吹き抜けの下に行く。

さて……エレベーターやらエスカレーターを使うことは難しいっぽいから、邪道で行きますか。

「よつとー」

「「「えっ!?!」」」

柱を蹴つて跳躍、ガラスを伝つて上に上り、それを見ていた看護師やら警官らが驚愕を露にする。

まあ、一応四歳のガキがヒーローでもないのにこんな事が出来ているから当然と言えば当然か。

「ほい、よつと。」

上層から僅かに漏れでる血の臭いから場所を割り出した後、その階で降りる。

「うーん、これは……。」

手で鼻と口を覆いながら足の踏み場を選びながら歩いていく。

「噓せかえるような血の臭いと多くの警官の死体が床に転がっていた。眼を抉り出した者、拳銃を口に突っ込んで撃つた者、死因は様々だがイカれてるとしか言えない死に様だ。」

「あ……お兄ちゃん……。」

「おう、来たぜ。」

「良かったよおおおお！うわあああああああん！」

「おい、いきなりどうしたんだ!?!」

その地獄絵図の中心に立っていた『認識の鳥』は俺に飛びかかり、人の胸で涙を流している。

「こりゃあ……、かなり懐かれたものだ。あのクソトカゲとアベル問題児その1なのに。問題児その2

「取りあえず、心を落ち着けて……。」

「うん……!」

落ち着いたのか、少しずつ文字の羅列が少なくなっていく、その影響か赤い羽や髪が少しずつ白くなっていっていき、疲れたのかそのまま寝てしまった。

「どうやら、『認識の鳥』の個性が発動条件である『不安』が解消されると白くなっているのか。」

「あ、そうだ。」

俺は警官が持っていた無線機を剥ぎ取って周波数を合わせる。

あの刑事さんに一応伝えておこつと。

「刑事さん、一応収まりました。」

『本当かい!?君の仮説は正しかったのか……!』

「まあ、閉じ込めていた階の人たちはほぼ全員死んでしまいました。」

『そうか……。それと、警察上層部から連絡が着ただけだよ。』

「内容は?」

『君の家がその子の身元を預かっていて貰うことになった。今から君の両親に話にく。』

「そうか……。それと、応援の人呼んでくんね?俺、もう疲れたから眠りたい……。」

『そ、そうか……。分かった、迎えを呼んでおくよ。』

「じゃ、切るね。」

俺は無線機を置き、『認識の鳥』を病室のベッドに寝かせた後、俺は精神的な疲れからすぐにそのベッドにうつ伏せに倒れてしまった。

取りあえず、今日は寝よう……。

中学にはヤバい奴がいることって多いよね?でも、ここほどではないはず!

「んぐ〜!」

俺はベッドの上で背を伸ばし、近くに畳んでおいた服に着替える。

……久々にあの夢を見たな。確か、俺とあいつが初めて会った時の頃だったか。

あいつは八百万の家に引き取られることになり、現在は俺の部屋の隣で過ごしている。

確か、名前は『暁 緋鳥』だったけな……。まあ、そこら辺はどうでもいいか。特に気にすることでもないし。

「あ、お兄ちゃん起きた?」

「……ああ。」

ベッドから降りると開けておいた窓から緋鳥が入ってきた。

緋鳥は薄く赤みがかった羽や髪の色をしており、身長は十歳前後で止まっていたかかなり小さい。また、飛ぶために進化しているのか体が軽く、二十キロ前後くらいしかない。顔立ちも整っているから学校ではかなりモテるけど、誰とも付き合ったことがない、

らしい。

てか、飛ぶのはあんまり好ましくないのだがな……。

緋鳥は元氣そうに飛び回ってはいるけど、体の中はかなりヤバイ。

先天的な骨粗鬆症と発育不良で骨は脆いし、内臓に大胆な省略があつて食べ物もふやかして潰した野菜や穀物しか食べれない。

実際、来た頃には熱で寝込んでいたりすることも多く、着地に失敗したときは足の骨がおれてしまったこともあつた。

一応、八百万の親父から緋鳥の保護者扱いされている俺にとってはかなりひやひやしてる。

「それより、ご飯を食べに行こー」

「……分かつてる。」

寝不足の目を擦りながら、ドアを開けて朝食を取りに行く。

今日はいいつらがふざけた行動をとることが無いように……祈ろう。

|||||

ここで一つ、説明しておこう。

俺の通っている中学は『財団中学』という公立の中学で材暖と言う地名と財団をかけた言葉遊びからきた名前だ。

そして、その中学には……ある特徴があるんだ。

「おーい!怖いから!」

「はははっ!怖くないよ!」

「くっそー!」

「ねえ、この呪文良くない?」

「それよりもこの人たち見たことない?」

頭に潜水ヘルメットをかぶったゴリラが透明な少女を驚かせ、小さな魔女っ子が濡れたようなワカメみたいな髪の毛の少女に話しかけている。

……正確な知識を持っている人たちなら分かるだろう。

この学校に入ってくる奴等の多くは、SCPの異常性を保有した人たちなのだ。

正直に言って、俺や緋鳥のカモフラージュになるから助かっているけど……こいつら、問題行動を起こすやつもいるから安心出来ないんだよな……。

「Hey!それでは今日は進路を決めてもらう……て、お前らはヒーロー科がある学校が大半なんだろう!」

「「「「イエーイ!!」」」」

某超有名なバンドのボーカルっぽい先生が言った瞬間、俺たちは立ち上がってその雰囲気に飲み込まれる。

まあ、これが先生の個性なだけだな。

それにしても、進路か……確か、百は雄英に行くとか言っていたし……一応、緋鳥を助ける為にヒーロー志望と言ってしまっただけからはヒーロー科に行くべきなんだろう。

「緋鳥、お前はどこに行くつもりなんだ？」

「わたしは……雄英の普通科かな？あそこは国内でも最高クラスの学舎でしょ？」

「……そうか。なら、俺も雄英のヒーロー科に行こうかな。誰かを守るためにはヒーローになる必要があるからな。」

俺と緋鳥の席は隣だから少し小話をする。

本来ならヒーローになるつもりは無かったけど……緋鳥を守るためには、ヒーローにでもならなきゃ全うに助けられない。

「なあ、緋鳥はどこに行くつもりなの？」

「雄英だよ？リリス。」

「……そう。なら、私はその商業科にでも行こうかしら。」

「あ、リリス。君も雄英？」

「そうよ？そういうクミホも？」

「そうよ。まあ、私は普通科を受けようと思うけど。」

「私は商業科よ。」

「そういえば、丸猫 弾はヒーロー科に行くつもりらしいわよ。」

「へえ!葉秋も同じなんだよ!」

「まあ、当然だと思う。こいつ、私たちのなかで一番強いし」

緋鳥の席では『リリス』と『妖狐変化』の異常性を保有した『リリス』と『クミホ』が
姦しく話している。

俺としては二人は友達だし、かなり強力なSCPの力を持っているから、いいんだけ
どさ……。

「よう、葉秋はどこに行くつもりなんだ?」

「雄英。」

「かー!こいつもかー!ラットはどう思う?」

「うーん、僕も雄英行こうかな。まあ、ヒーロー科には行かないけど。」

「なんでだ?」

「表に出るのは好きじゃないんだ。そう言うワンダーは?」

「雄英のサポート科。それと、今日は来てないけどサイボもサポート科らしい。」

「ふーん、そう言えば葉秋は?」

「雄英のヒーロー科。」

「うん、知ってた。」

全く、なんでここまで俺がヒーロー科に行くのが当たり前、みたいな風潮になってんだ？理解できない。

上鳴小僧と出会ったけど、流石ヒーローの卵だ。俺らの本質を本能的に理解出来る奴は中々いない

時間がたつのは案外早い。

あつという間に雄英の試験日になってしまった。

「いやー！この日が遂に来たね！」

「ああ。にしても、こここのヒーロー科に行く人多くない？」

「そりゃあ、あのナンバーワンヒーロー『オールマイト』の母校だし、国内最高峰のヒーロー科となれば 人は多くなるさ！」

茶色い毛並みに猫っぽい顔をした弾は心底楽しそうにしている。

俺としては、緋鳥たちが何か問題を起こしていないかのほうが心配なだけだな。

……まあ、『小さな魔女』や『おお、こわいこわい』、『校外学習』とかのマジでヤバい奴等が他校を受けて助かった。あいつらと一緒にいれば何時被害者がでるか分かったもんじゃない。

因みに、この学校を受けるのは俺、緋鳥、丸猫、リリス、クミホ、ワンダー、ラット、サイボが受けることになっている。ヒーロー科は丸猫と俺しかないけど。

そういえば、財団中学に入らなかったSCPシリーズはどうしているんだろう。人間に敵意がある奴等の大半がまだ見つかっていないしな。

「なあ、どこがヒーロー科の試験会場か知らない？」

「……俺たちもヒーロー科を受けるつもりだ。」

「僕もだよ！」

「ならば、一緒に行こうぜ！」

「構わない。」

「いいよ。」

どこかノリが軽そうな金髪のチャラ男と一緒に試験会場に向かう。

こいつ……頭がアホそうだけど、試験合格できるのかな……？

「そう言えば、あんたらの名前は？俺は上鳴 電気。」

「丸猫 弾。」

「藤多 葉秋だ。」

「なら、試験受かるように頑張ろうぜ！」

「分かってるよ。」

全く、こいつは何を言っているのか。

ヒーローになるためには試験を受からないといけないんだよ。

そんなぐらいい察しろよ。

|||||

第一印象は『異質』だと思った。

片方は人の良さそうな笑みを浮かべる茶色っぽい毛並みの猫の異形系、もう片方はオレを警戒している感じのトカゲの異形系。

二つとも、よく町とかで見かけるような個性だ。けど、その存在がヤバいと感じてしまった。

なんつーか、人の形をとっているだけの人ではない存在つー感じがして……正直に言つて、『怖い』と思っちゃまった。

話してみると意外と気さくな弾という男と、無言だけど頭の良い葉秋と直ぐに仲良くなれた。

「……そういえば、さつきから何を恐れているんだ？」

「えっ?! いやいや、恐れてないって!」

ヤバツ、気づかれた!?

「顔に出てる。……まあ、恐れても仕方ないか。俺らの個性は正直に言えば反則の類いだ。……簡単に言えば、『災害』に等しいと言える。」

まるで、その反応が当たり前かのように葉秋は話す。

弾は……トイレに行ってしまった。えっ、話を逸らすこともできないじゃんか！
「てか、『災害』って……言い過ぎじゃね？」

「事実だ。……あまり話したくないが、まあ良いだろう。」

「えっ、何々？」

「俺の個性さ。」

お前、まさか自分の手の内をさらすのか？

オレでも分かるバカなのか……手の内を知られたところで問題ないのか。

「俺の個性は『クソトカゲ』という個性だ。」

「ブフォ!？」

あまりにも酷すぎる個性名の余りつい吹いてしまう。

く、クソトカゲって……!まさかの罵倒表現かよ……!!

「……能力は、不死身。体の八割が消しとんでも死なないし、数回攻撃を受ければ耐性がついて攻撃は受け付けなくなる。生半可な攻撃はそもそもダメージに入らない。」

「は、はあ!？」

あまりにも反則過ぎる個性の内容に絶句してしまう。

た、確かに不死身だ……!こんな反則染みた個性なんて知らねえ!?

「俺らの中学のやつらは危険性、異常性のベクトルが全く違うけど、凶悪だ。」

「……………」

「お前の感性は間違ってる。普通なら気づかない『恐怖』を感じた。誇ってもいい。さあ、さっさと行こうぜ。」

葉秋はさっさと試験会場の中に入ってしまい、オレもそのあとを着いていく。褒めているのか、貶しているのか……分からない奴だな。

試験の前の説明って面倒だよ。試験も面倒だし、ホントに嫌になるよ

「よし、さっさと実技試験を受けよつと。」

長つたらしい説明を寝て過ごした後、実技試験の試験会場に向かう。

内容はロボットを片っ端から壊していけばいいというシンプルな物。まあ、人助けが全ての基礎であるヒーローにおいて、人助けも得点に入ると思うけど。

「つと、すみませんね、ぶつかってしまつて。」

「いや、ぶつかってしまつて謝らないのは男らしくねえよ。」

「……そうか。」

ツンツンした黒い髪の青年にぶつかってしまったが、すんなりと許してくれた。

いいやつだな。多分、この試験は合格するやつだと思う。

『では、スタート!』

「自由すぎねえか!?!」

マイクから流れた声に反応して俺は一気に加速する。

おいおい、いきなりスタートするか普通!?!この学校、めちやくちや自由過ぎるだろ!?!

「グルアアー」

適当に見つけたロボットの頭を踵落として粉砕し、近くにいたロボットに粉砕したロボットの胴体をぶん投げて粉砕する。

「ん……？」

うわー、何かデカイロボットがあるなー。

チビロボットを二十体ほど壊してからは数えていなかったけど、あんなデカロボットは初めて見た。

けど、粉砕しがいがありそうだ。

「ふう……。」

心拍数と血流を呼吸で沈静化し、ロボットを見る。

ああいったロボットの欠点は全体の間接部分。それは製作者も予測しているだろうからあえて狙わない。逆に狙うとしたら最も硬そうな心臓部分、若しくは頭。武器を使つて倒してもいいけど……これを見ている奴等に手の内を知られるのは割りに合わない。

となると、拳か。仕方がない、久々にあれをするか。

「——『霸源』——『怒号』」

リミッターを解除し、ロボットの脳天まで跳躍し、頭に踵落とし、拳打、足踏みなど

を常人なら嵐でも起きたかと考えてしまうほどの超高速で繰り出す。

これは覇源によるリミッター解除を更に進化させ、一点を粉碎する八連撃を面を破壊する八連撃に変えたものだ。

覇源はリミッターを解除して行使する技だから普通に痛い。……まあ、その程度しか弱点は無いけど。

「ブ、ブッコロ……。」

「殺せないよ。だって、俺は不死身だからな。」

頭が一瞬でペしやんこになったデカロボットを最後に蹴り飛ばして倒れさせる。

全く、この程度なら俺らの中学の奴等のほうが強いぞ？……まあ、試験用のロボットだから仕方ないとしかいいえないか。

『試験、終了了了！』

あのスタートの声と同じ声の言葉と共に試験は終了した。

さて、緋鳥を連れてさっさと帰ろ。

合格通知って滅茶苦茶ドキドキするよね?けど、俺にとつては緋鳥の個性暴走のほうドキドキするよ

そして、あの日から数日がたった。

「……来たか。」

「まあな。」

俺は弾を家に入れ、俺の部屋に案内する。

部屋の中には雄英を受けた財団中学のメンバーがそれぞれ集まっていた。

昨日、ワンダーが『みんな合格したかちゃんど理解しておきたい』と言ったのが始まりで、あれよこれよと決めていった結果、俺の部屋に全員集合しておくことになったのだ。

「な、なんなんですか、これは……。」

「あ、百。」

「葉秋さん、この人たちは……?」

「俺の中学の友達。みんな雄英を受けたメンバーだよ。ああ、普通科や商業科に行った奴のほうが多いぞ。」

「そ、そうでしたか。」

「なあ、葉秋。この人誰だ？うちの中学の人では無いし……なんつーか、俺たちとは全く違う奴だと思うけど。」

「察しがいいな。この人は俺が引き取られた八百万家の八百万 百だ。個性は『創造』、俺たちとは違って危険性のない個性だ。」

「へえ……あ、俺は弾。雄英のヒーロー科を受けたんだ。」

「雄英の!?!と言うことは私と同じクラスとなることもあるかもしれませんね。」

「ん……? ああ、推薦組か。」

「取り敢えず、部屋で開くか。」

花を咲かせているところ悪いけど、他の奴等が今か今かと待っているんだ。さつさと開いたほうが精神衛生上いい。

「分かった分かった。じゃあ……みんなー! 開けるぞ!」

「「「「「イエーイ!!」」」」」

それぞれが持参してきた紙を開けると根津校長かオールマイトのホログラムが出てきた。

『おめでとう藤多 葉秋少年! 合格だ!』

「いよっしあああああああああああああああああああああああああああああああああ

あああああ!」

オールマイトが俺の合格を宣言した瞬間、柄にもなく大声を出してしまった。

オールマイトが言うには、ロボット破壊ともう一つ、人助けのポイントで合格したらいい。

他の奴等はどうなっているんだ?

「よっしゃあ!合格だ!」

「私もですね。」

「私も、普通科に合格しましたわ。」

「わ、わたしも。」

「俺もサポート科に行けるぜ!」

「私モサポート科ニ行ケルヨウデス。」

「あ、僕も普通科に行けるよ。」

どうやら、全員雄英に行けるらしい。

国内最高峰の高校にこれ程合格者ができればうちの中学は万々歳だろう。

「おめでとうございませす、皆さん!」

「さて、それじゃあめでたい事だし……宴会でもしようぜ!」

あ、ワンダーの馬鹿野郎!?この能天気が!?そう言うこと言うこと

「私も参加しますわ。」

「私も参加しよう。」

「わ、わたしも。……ここ、私の家だし。」

「俺も！」

「僕も！」

「私モ。」

「こうなるんですねこんちくしょう!!」

「あ、それではお父様に伝えておきますね。」

しかも、百までノリノリだし!?

分かったよ、付き合ってやるよ!

|| || || || || || || ||

「……どうかしました、オールマイト。」

「や、やあ相澤君。……少し、気がかりな点があつてね。」

「……気がかりな点?」

夜、私と相澤君は廊下で缶を片手に少し話をしていた。

……今回、入学してくるところに奇妙なところがあつてね。

「財団中学、という公立の中学は知っているかい?」

「確か、今回かなりの人数が入った中学ですね。……そこがどうかしましたか?」

「いや、彼らの個性について調べただけだね……。隠蔽されていたんだ。」

「……隠蔽?」

財団中学の人たちは何故か個性その物が隠蔽されていた。……少し、ニュアンスが違うかもしれないけど。

「そう、少年少女らの個性はパッと見たときは気がつかないほど巧妙に隠蔽されていた。まるで、知ってはいけない情報があるかのように。」

「確かに、普通の公立中学なら隠蔽なんてする必要は無いですね。」

——彼らの知らないことだが。他校に行った生徒の中にデータそのものにアクセスするSCPの特性を保有した青年がいた。彼と葉秋が協力して行政に保管されている他のSCPシリーズの個性をオブラートに包んだのだ。……あまりにも危険過ぎる個性のため。

「彼らに問いただしてみますか?」

「いや、それは良いだろう。」

「……何故ですか?」

「……おおよその検討はついている。彼らの個性の正体を知っているのは……。葉秋少年だ。」

彼は自分の個性を『SCP』という言葉で表していた。そして、その中には知るだけで危険なSCPも存在するらしい。

藪から蛇が出てきたら……それが大蛇だった、なんてことは起きてはいけなからね。

「そういえば、その藤多とは知り合いましたね。どのような人だったんですか？」

「……一言で言えば、『冷静』、かな？ 私が彼と出会ったのは彼がまだ四歳だった頃だ。その頃から彼は大人顔負けの冷静さだった。」

「……確かに、そういった人は自分の個性をもみ消す、なんてことをすることは予想できないな。」

「取り敢えず、君には葉秋少年を頼むよ。」

「……分かってます、オールマイト。」

さて、休憩もすんだし、仕事に取りかかろう。

女は怖い、めっちゃ怖い。何せ、敵対したら男に勝ち目はないからな。

「さて……。」

合格通知が来てからの時間は早かった。

俺は雄英の制服を着て、初登校となった。

いやー、まさかクソトカゲである俺がヒーローを目指し、国内最高峰の雄英高校に行くなんて、思ってもいなかったぜ。

「あ、お兄ちゃん。そろそろいく？」

「ああ。少し早めに行っておいて損はないだろう。」

「なら、わたしも一緒に行くよー。」

俺と緋鳥は電車に乗り、雄英高校まで行く。

いやー、試験で来たけどやっぱりデカイよな、雄英。それだけ設備が豊富なのかもしれないな。

「あれ？葉秋じゃん。」

「合格していたのか、上鳴。」

ちようど俺らと上鳴は合流した。

てか、上鳴も合格したのかよ……。まあ、ヒーローの卵になるだけの素質はあるっぽいし、当然なのかもしれないけど。

「ねえねえ、お嬢ちゃん名前痛たたたたたたたた!?」

「緋鳥にちよつかいだしてんじやねえよ。」

「あ、リリース。」

「おはよう、緋鳥に葉秋。」

なんかニヤニヤとしながら緋鳥に近づいた上鳴はリリースにアイアンクローされて持ち上げられた。

良かったなー上鳴。俺がやってたらその頭、粉碎していたぞ？

「そ、そっちの女性は？」

「リリース。その二人と同じ中学だったから知り合いだな。それと、そろそろもう一人来るぞ?」

「あ、三人ともー! って、リリース何してるの!?!」

「ああ、緋鳥にちよつかいかけていた馬鹿をアイアンクローしているだけだ、クミホ。」

「そ、そろそろおろして……!」

「慈悲はない。始末していいよ、リリース。」

そのあと、上鳴は滅茶苦茶ボコされた。

|||||

「へえ、葉秋の義理の妹なんだ。」

「まあな。」

俺と上鳴は一年A組の席で適当に話をしている。

意外とこの時間帯から来ている奴等もいてビックリだな。

「こらっ！机に座ってヒデブツ!？」

「それで、何で人の妹に手を出したんだ？何？殺されたいの？」

「い、いやそうじゃなくて……て、誰か殴ってるよ!？」

「人の話に割り込まない。幼稚園で学ばなかったのか?」

「何か話に割り込んできたメガネを殴り飛ばしながら話を続ける。」

慈悲は、ない。

「てか、妹ちゃんレベル高くね？さっきのリリスとかクミホとかも滅茶苦茶かわいかったし。」

「……あの二人、特にクミホに手を出さない方がいいぞ。前にナンパしてきた二人組がいたんだけどさ、相手の心を操って殴りあいの喧嘩をさせて大爆笑していたんだぞ?」

「ひ、ひえ……。」

まあ、リリースもリリースで男を攻撃させてきた女を不妊症にさせてしまったけど。

あいつらはかなり強力な個性だったから行政のデータを改竄する必要が出て来てしまったからな。

「てか、それならヒーローになればいいのに。」

「試験内容を考えろ。精神操作の個性であるクミホには全く向かない内容だろうが。」

「あつ、確かに。」

「つと、そろそろ時間だし、席に戻らせてもらおう。」

俺は上鳴との会話を打ち切ってさっさと席に戻る。

さて、今日はどんな授業があるかな？

「……………良いだろう。」

さて、保険もかけたし個性把握テストをやりますか。

まあ、俺が最下位になることはないだろうけど。

|||||

『一種目 ソフトボール投げ』

さーて、やりますか。

「では……………始め！」

「ぬおりゃ！」

掛け声と共にリミッターを解除させた腕力で投げたボールは青い、青い空を飛び……

成層圏まで飛んでいってしまった。

うーっわ、まじかよ。確かに全力でやったことはない（幾らなんでもSCP内最高ク

ラスの問題児二人の身体能力を使って投げるつもりはない。）とはいえ……………ここまでと

は。

「……………藤多葉秋 無限。」

「すげえぜ葉秋！さすが男だぜ！」

「少し静かにしてくれないか。」

相変わらず暑苦しい男だな、切島。

次は……あの天然パーマ、確か緑谷出久だったか。
「スマツ……え？」

突如個性が消えて力が抜けたボールが側に落ちた。

個性が消えた……？あ、思いだした。相澤先生は確かアングラ系ヒーローの『イレイザーヘッド』だ！なるほど、あれが個性『抹消』か。……多分、異形系の個性には効果無いっぽいけど。

「もう一度やってみろ。」

「ツ………はい！」

ボールを拾った緑谷は再び投げる体勢になる。

さあ、どうなるか。

「スマツシュ!!」

緑谷の手から放たれたボールはそのまま凄まじい勢いで空を飛んだ。

なるほど、個性を腕全体ではなく押し出す一瞬に指一本だけに収束させてエネルギーを圧縮したのか。こういう使い方もあるのか。

いいものを見れたし、次の競技に行こう。

|| || || || || || || || || ||

『二種目 立ち幅跳び』

「ドーン！」

脚のリミッターを解除してアホみたいに跳躍する。

因みに腕の反動は治っている。さすがクソトカゲ、回復能力もかなり高い。

「さて、次々！」

「てかさ、葉秋は除籍が怖くないのか？」

「生憎だが上鳴。俺は除籍されないと自信を持って言える。」

あんまり個性を使う機会のない上鳴は若干心配そうな顔をしていた。

まあ、お前の個性はみた感じ身体能力系じゃ無いっぽいし、仕方ない仕方ない。

|||||

『三種目 五十メートル走』

「君！一緒に走らないか!？」

「いいぜ。」

何かロボットみたいに手を振っているメガネに話しかけられてそれを了承する。

てか、このメガネ、朝ぶん殴ったメガネじゃん。

「よーい……ドーン！葉秋、0.000001秒」

「うわあ!？」

リミッターを全て解除して最高速度——音速以上の速度で走り、最高時速をマ—

個性把握テスト 下。さっさと先生と戦いたい。という
訳で頑張りますか

四種目 持久走

「よい、スタート。」

着替えてきた後、相澤先生の気だるそうなこえとともに俺らはスタートする。

このテストは純粹な体力勝負だし、全力の半分位だせばいいほうかな。

因みに、順位は二位。一位はバイクを作った百だ。……うん、個性ありになればこいつほどの应用能力があればどんな競技にも対応できるか。

|||||

五種目 握力

「ふん！」

普通に少し力を込めて握った瞬間、握力を測定する機械は粉碎される。

……うん、さすが問題児コンビのパワーだ。大抵のものは粉碎出来てしまうな。

また、評価は無敵だった。大気圏までボールを投げた犯人が言うのもなだけでさ、それでいいの？

あまりにも簡単に言う相澤先生に葉隠は悲鳴をあげる。

けど、この成績を見た感じ、最下位の筈の緑谷が除籍対象になるはずなんだけどな……？まあ、確かに先生は「成績が低かった奴が除籍対象になる」とは言ったけど「最下位が除籍対象になる」とは言っていないかった。つまり、最下位である緑谷が残り一つ上の葉隠が除籍対象になる今の状況が出来上がった、とみて良いだろう。

「……まあ葉隠が負ければ、と言う話になるがな。」

「えっ……？」

「あいつはこう言った最悪の場合に備えて始める前に交渉をしていたんだ。『もし、最悪の場合になったら自分と戦い、勝ったら除籍の話を無しにしてくれ』ってな。」

「まあ……先生の個性はおおよそ発動系や放出系、身体強化系にしか使えないから異形系である俺が一番勝率があっただけだがな……。」

実際の話はちよつと違う。

この場合、先生に対する勝率は良く見積もっても三割程度だ。それだけ実戦に対する経験が俺には不足している。

その経験をどれだけ超えられるか、それが俺が勝つための絶対条件だ。

「それじゃあ、始めるか。」

「ええ、始めましょうか。」

俺と先生はそれぞれ攻撃をするための体勢に入る。
さて、どう攻めるか。

人間VSクソトカゲ、そのバトルの行方は!?……て、もう投稿してる時点で分かってるか

正直に言えば、俺はあいつを……葉秋を見くびっていた。

ロボ・インフェルノの頭が完全に潰されていたことからオールマイトに匹敵するほどの身体能力を保有しているが実戦経験は無く、武術を学んだ様子は無かった。だから油断はしなかったが、見くびっていた。

その予想は——

「かつ……はっ……!?!」

大きく外れた。

|||||

えっ、弱っ!?

俺は自分が掌打で吹き飛ばした相澤先生をみて哑然とする。

やったことは単純。

試合開始してリミッターを二つほど外して音を越えた速度……光の速度に匹敵するほどの速さで先生に近づき、掌を軽く腹に当てたのだ。

「そしたらあまりの速度に驚く暇も与えずに先生は受け身も取れずに吹っ飛んでいったのだ。」

「いやー……個性の相性の問題とかがあるとは言え……ここまであっさりとやられるものなのかな？」

「えっ!? えっ!? な、何が起きたの!?!」

「み、見えなかった……!」

「クソが!」

「あれだけの速度……何かの個性……?」

「……すげえ……。」

あまりにもあっさりとした決着に他のクラスメイトたちが我に帰り、驚きの声をあげる。

因みに今回の服は破れてない。これは、実家がヒーロースーツの製造業の社長であるサイボが万が一にと造ってくれたサポートアイテムの一種『運動着(仮)』。見た目は普通の雄英の運動着だが、光速にすら耐える強度、柔軟性を持っている。

さすがサイボ、造ってくれる物は滅茶苦茶性能がいい。……知られたらヤバいけど。それに……光の速さに入った結果もあるのだがな……。

「えっ……? 皆さん、葉秋さんの方を見てください!」

トと言うほどではない。強いていうなら……治るとき滅茶苦茶痛いのと見ている側からエグい位にグロテスクなことぐらいがデメリツトかな。

「葉秋さん……昔からの幼なじみですが、貴方の個性については異形系であることしか分かりません。ここは、言ってみたらどうでしょうか。」

「……まあ、いつか。隠すことでもないし。俺の個性は『クソトカゲ』。体の八割が消し飛んでも生きていられる程の生命力。それを数秒、あるいは数十秒もあれば回復するほどの回復・再生能力。パワー、スピードの発動系の個性に匹敵する程の身体能力に普通の人も遥かに速い反射神経……。医者に言われた通りに言うならば……異形系最強クラスの個性、と言えるだろう。」

「」「」「」「」

俺の個性の全容を聞いたクラスメイトは再び哑然としていた。

……ここに武器をどこからか出したり、死んだら一定時間後復活する『アベル』まで言ったらさらに凄いことになりそうだから言わないでおこう。

「それよりも、先生は大丈夫なのか？」

「ああ……体の骨が結構折れてはいるが……生きてはいる。」

そこに全身ボロボロの相澤先生を筋肉質な奴とThe・普通の奴が腕を肩に乗せて戻ってきた。

うっへー……痛そー……。

「取り敢えず……葉隠の除籍の話は無しだ。だが、何時でも俺は除籍にする事ができる覚悟しておけ。」

「は、はい!」

「そして……他のやつらも今回は免れたとは言え、除籍させれる。真剣に取り組むように……。」

「「「は、はいっ!」」」

「今日の授業はこれで、終わりにする……。」

先生はそのまま二人に連れていかれた。……まあ、行き先は保健室だろうな。

ま、俺は教室に戻るか。

「あ、葉秋くん!」

「なんだ? 葉隠。」

いざ俺が教室に戻ろうとしたら葉隠が話しかけてきた。

何か用でもあるのか?

「あの……さつきは私の除籍を無しにしてくれてありがとう。」

「……俺は誰一人として欠けさせたく無かっただけだ。気にすることはない。」

「でも……それでも、感謝しないと……!」

顔は見えないけど、どこか必死そうにしている葉隠は嬉し涙を流していた。

まあ、除籍が回避できてそれは嬉しいだろうよ。

「ま、この話はここでお仕舞いだ。」

「えっ？あ、うん！それじゃあ！」

そのまま葉隠は教室の方に走っていった。

さて、時間が結構食われたけど、戻りますか。

|| || || || || || || || || ||

「あのトカゲ野郎羨ましいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！」

「止めとけ峰田。あいつはヤバい！」

戦闘訓練かー。負けるつもりは全くないぜ

「今日があれの授業だね、葉秋くん！」

「ああ。葉隠。」

俺は葉隠と話ながら体を動かして今日の調子を確かめる。

あれから数日後……遂に、ヒーロー科がヒーロー科足らしめるヒーロー基礎学が始まるのだ。あの日からなにかとちよっかいを出してくる葉隠もどこかわくわくしているようだ。

「私が普通にドアから来たあ！」

あ、オールマイトが入ってきた。

本当にすげえ速度で来たな（俺ほどではないけど）。

……………あれ？

（何かおかしいな…………。）

四歳の頃に会った事があるから分かるけど…………オールマイト、どこか体調が悪いのか？呼吸をしにくそうにしてるけど。

「今日はこれ！戦闘訓練!!『個性届け』と『要望』沿ってあつらえたコスチューム戦闘服を着てグラウ

ンドβに集合！」

「はい。」

コスチュームが入ったロッカーからそれぞれコスチュームを取っていく。

俺は要望なしで書いたけど……どんなものが来るのだろうか。最悪、直ぐにクーリングオフしよう。

「ねえねえ、葉秋くんはどんなコスチュームにしたの？」

「……要望を出していない。まあ、動きやすい服ではあると思うが……最悪でも動きの阻害だけは止めてもらいたいな。」

「確かに葉秋くんは速度についてこれるのって替えの体操服だけじゃない？」

「……まあ、そうだな。」

構ってくる葉隠と一緒に俺らは更衣室に向かうのだった。

|||||

「……………」

「あ、葉秋くん！って、その服は何!？」

「…………なぜ、こうなった。」

俺が着てきた服を見て葉隠は驚く。

下は黒の長ズボン。上は裸に黒のマフラーを着せるといふ大胆な服装。下は隠せて

いる分まだいいけどさ、マフラーをしているせいで上半身裸なのが強調されている。

……クーリングオフしよう。今回の戦闘で破けたりしたら即刻送り返してやる。

そのあと、オールマイトの話が始まる。

何でも、ペアで別れて『ヒーロー組』と『ヴィラン組』と別れるらしい。

「ですが先生！このクラスの生徒は21人、一人多いですがそれはどうしますか!？」

「そこは1対2でやってもらうさ！そして、相手は二回やってもらう事になるけどそれは実戦にもつうじることはある！それでは、抽選を始めていこう！」

ペアと対戦相手はクジで決めるらしいけど……さて、俺は誰と組むのだろうか。

「チーム『K』藤多 葉秋少年！『ヴィラン組』！対戦相手はチーム『C』峰田 実アンド八百万 百！」

「よろしくお願いいたしますわ、葉秋さん。」

「オメーみたいなりア充には負けないからな！」

「よろしく頼む。……けど、峰田。俺はリア充ではない。」

「ムツキー！言わせておけば！」

そんなこんなで練習は消化していく。

……峰田。一応居候の身として言っておく……。八百万の胸をガン見してんじやねえよ。確かに露出度が凄いけどさ。

基本的に相手の隙を突くって方法は自分の隙を理解している敵には通じないよね？

【葉秋 side】

「……………さて、どう動こうか。」

俺は最上階に置いた核爆弾（偽物）の前で胡座をかきながら目をつぶって音と空気の動きを捉える。

……………屋外ならやつてもあまり効果はないが、ここは屋内、相手の位置はくつきりと分かる。

「……………成る程な。」

空気の流れと走る音から敵の位置を正確に割り出し、立ち上がる。

まずは変態ぶどうから狩りに行こうか。

|| || || || || || || || || ||

【八百万 side】

「はあっ……………はあっ……………」

私は柱の影に隠れながら核爆弾を探す。

私は直ぐにロープを作り出して近くの柱に括り、窓から慎重に降りていく。挟まっているのは腰の部分。そこを抜けば恐らく自力で抜け出せ——

「えっ?」

突如、私の命綱であつたロープから力を感じなくなり、空中に落ちる。

作り出して直ぐにこんなことは起きないです……。だって、造れるものは基本的に……新品ですから。

「がっ!」

「……………」

瓦礫の上に落ちた私を……葉秋さんは窓から冷徹な眼で見下ろし……練習終了のお知らせが鳴つた瞬間……私は、意識を手放した。

|||||

【葉秋 side】

「よし、これでおしまいだな。」

俺は意識を失つた百を見て下に降りる。

いやー……ここまであつさりと誘導されて助かったよ。

俺がやつとことは単純。

まず、峰田がブドウを壁にくっ付ける僅かな音を探り、来そうだなと思う位置で壁を破壊、足場と手のつかえが失くなった峰田はあっさりと落ちていく。この際、峰田が張り付いている場所が走っている百に近い位置でなければならぬ。

次に、音を出さずに静かに降りていき、峰田を助けようとしている百のロープを切り落として地面に落下させる。注意点としてあげるのなら……ロープを切るタイミングを間違えると死ぬ可能性があるから注意することかな。

峰田？あいつは多分生きてるだろ。見た感じ、近くの瓦礫にくっついて衝撃を殺したし。

「……さて、回収しますか。」

「いてええええええじゃねえか藤多あああああああー！」

「五月蠅い。」

俺は壁を這いながら地面に降り、二人を回収する。その際、五月蠅く泣きわめく峰田の首筋に手刀を打ち込んで気絶させる。

全く……うっさいな……。中学時代でもこんな軟弱はいなかったぞ？

まあ、さっさと医務室に運んで講評を聞かないとな。

閑話 タルタロスの囚人

「ふわあ……。」

「もう、天野焔くん。欠伸しないで。」

「分かりました。」

僕、天野焔はあくびをしながら仕事場である犯罪者を収容する『タルタロス』。その最下層を僕よりも若い終主任と一緒に歩いている。

僕と主任はどっちも無個性だけど……この『タルタロス』、その最下層にアクセス出来る権限を持っている。

タルタロスとは、この国に置ける刑務所の中で最高に位置する施設である。ここにはとんでもない個性の凶悪なヴィランたちが収容されているのだ。

でも、これはデコイ。

タルタロス設立の理由。それは……

「にしても、ここに収容されているヴィランってどんなヴィランなんだろうか。」
「……分からない。けど、危険なのは分かっているわ。」

重く、暗い雰囲気の中、通路を歩いていく。

タルタロスとは……最下層に存在する僅か五名のヴィランを封じるためだけに作られた刑務所なのだ。それほどまでに……恐ろしいヴィランなのだ、ここに収容されている奴等は。

「……おや、新しい顔ですね。」

すぐ近くにあつた大きな牢屋から声がして、顔を向ける。

中にいたのは……青い髪をしたアラビア風の肌がやけた男だった。多分、年齢は三十代くらい。理知的な瞳は持っていたタブレットPCに向けられている。

「こ、この人は一体……。」

「あ、申し遅れました。私はカインといいます。」

「は、はあ……どうも。あの、何を読んでいるのですか？」

「岩窟王、と言う小説ですよ。そろそろタルタロスを抜けようと思ひまして。」

「なっ……!」

「動かないで!動いたら撃つわよ!」

あまりにも当たり前前にされた脱獄宣言に僕は啞然とし、主任は腰から銃を引き抜く。

どんな個性を持っているか分からないけど……カインは銃を見ても何も動じていなかった。

な、なんなんだこの男は……!

「私に撃つても構いませんが……っ！避けて！」

「主任、危ない！」

「きゃあ!？」

カインが叫び、僕が動が聞いた瞬間に主任を押し倒した瞬間、四つの牢屋が粉碎され、その扉の一つが頭を掠める。

あ、危なかった……。もし、カインの言葉に反応できなかつたら……。死んでた。

「うーん！久々に外でたよ。」

「なにやっているんだ、ビル。さっさとカインを取って抜け出そうぜ。」

「……眠い。」

「あ、寝ないでね安眠。」

その中から四人の人影が出てくる。

テディベアのような茶色の髪の毛の年端もいかない少女にマフィアみたいなスーツを着た悪魔みたいな角が生えた若い男、眠そうに目を擦る手に時計のような痣のある十代くらいの少女、その世話をする黒髪にセーラー服を着た高校生くらいの少女。

四人ともタルタロスでは見たことがないし、メディアでも取り上げられていない。けど、恐ろしい特性を持っていることは本能的に分かる。

「ねえ、この人たちはどうする？」

「まあ、眠らせてください。殺す理由はありませんし。」

「……分かった。」

「一体何を……す……る……。」

ヤバい、寝る……。

僕は主任に覆い被さるように、眠りにつく。

——この日、難攻不落のタルタロスから……最悪の脱獄者が現れた。

悪夢！刑務所から集団脱獄。しかも、脱獄したのは最悪な奴等だ！

「君、やり過ぎ！」

あの二人を保健室まで連れていつて戻ってきた瞬間にオールマイトから言われたのはこの言葉だった。

やり過ぎって……元々、ヴィラン組だったから普通に考えて外道のような行動が好ましいと思っただけなんだが。

「まず、壁を破壊して峰田少年を落としたところだ！いきなり攻撃なのは酷すぎると思うのだがね！」

「いや、これは實際を想定した実践的な訓練だった筈。なら、ヴィランがするような外道な方法で潰した方が楽なのでは？」

「まあ、それはそうだが……。これを除けば特に言えることはないかな。けど、実際に自分にそれは返ってくるかもしれないから注意しておくように。」

「へいへい。」

オールマイトの話の話を適当に受け流した後、全体的な講評を聞いて教室に戻る。

返ってくると言われても……俺、基本的に死なないし……死んでも多分だけアベルの特性で一定時間後復活すると思うけどな……。

「ねえねえ! 今日の後省会しない!?!」

「えっと……確か、芦戸か。俺はパスする。あいつと一緒に帰らないと。」

「あいつ?」

「……詳しく話すと復活した変態ぶどうが暴走するから言わないでおく。聞くんなら百に聞け。俺はあいつの家に居候しているから。」

「なんつー羨ましいことしてるんだよ藤多あああああああああごぶつ!」

芦戸と話しているとき、涙を流しながら峰田が俺の胸ぐらを掴んでこようとしてきたからそのまま一本背負いで投げる。

体がちっさいから殺さないように手加減しないといけないのは面倒だ。

「じゃあ、帰る」

「お兄ちゃん遅い!」

「『お、お兄ちゃん!』『』」

さっさと荷物を入れて帰ろうとした緋鳥が扉を開けて入ってきて、言った言葉にみんな騒然とする。

……お兄ちゃん、とは緋鳥は言っているけど緋鳥と俺は同年代なんだが。まあ、俺の

方が産まれたのは早かったけど。

「葉秋くん、妹がいたのか!？」

「義理のだから。」

「もつと羨ましいじゃねえかこのやろおおおおおおおおお!」

芦戸は興奮するし峰田は暴走するし、本当に大騒ぎになりはじめた。

全く……こういう事が起きるのを予測していたからさっさと帰ろうとしたのだが……。

「あ、お兄ちゃん。このニュースを見た？」

「ん?……『タルタロスから、五名の犯罪者が集団脱獄』……?」

「え、タルタロスから!？」

ちようど包帯を巻いて戻ってきた緑谷が驚いた声をあげる。

知っているのか。この、タルタロスって言う場所を。

「緑谷、なにか知ってるのか?」

「タルタロスは、日本で最も難攻不落の刑務所と言われている場所なんだよ。そこから脱獄するなんて……一体、どんな個性を使ったんだらう……。」

「えつと……『振り子時計のような音がしたと思ったら眠っていた』らしいよ?」

「睡眠、ねえ……。」

振り子時計に睡眠となると、『安眠時計』ぐらいしか、思い浮かばないけど……。けど、『安眠時計』自体はそこまで強くない筈だ。聞かなければ問題ない訳だし。

「あと、『上告します』と血で書かれていた部屋があつて、その部屋にいた人たちは……体の一部分が抜き取られていたらしいよ?」

「……まさか、俺や緋鳥と同じような、二つ持ちか?しかも、『上告します』……『生存権』か。」

「ここで大声で叫びたいのはやまやまだけど……抑えないと。もし、大声で叫んだら根掘り葉掘り聞かれるのがオチだ。それは避けないと。」

「それと、緑谷はどっかに行つてしまった。どこに行つたんだろうか。」

「それと、耳を取られた人もいたらしいよ?」

「アウトおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおとおおおとおおお!」

耳を取るやつなんてあのキチグマしか思い浮かばないのだが!?!あいつが収容違反なんでしたらマジでヤバイ!

「ど、どうかしたの?」

「い、いや、何でもない。他には?」

「えつと……突然暴走した犯罪者がプロヒーローを殺したり突然血だけを残して人が消

えたりしたらしいよ？」

あれ？何だろう。凄く嫌な予感がする。

「と、取り敢えずさっさと帰ろうか、緋鳥。」

「う、うん。」

話を無理やり中断して俺と緋鳥は教室から出ていった。

確か、あいつに話せば調べてくれそうだし、依頼するか。それと、もしものために元財団中学、知っている限りの在校生、卒業生に連絡しないと。

『もしもの時は、全員で対処する』。それが財団中学の伝統であり、俺たちをしっかりと繋いでいるものだからだ。

脱獄した奴等はSCPシリーズだよな?なら、こっちも用意しないと!

「……ニユースは見たか?」

『見たぜ?こりゃあ……また……。』

夕食後。俺は自室にある複数の画面があるパソコンで話している。

名前はオール・アイ。個性は『AI』。その名前の通り『SCP1079 オールドAI』であり、『SCP11011FR 私たちのいる場所』でもある。

そして、財団中学在校生と卒業生の個性データ改竄をしてもらっている。

「お前の個性の一つは『特定の個性の情報を収集する』というものだった筈だ。……俺らと同類か?」

『まーな。『私たちのいる場所』の力で調べたがよボンクラ。取り敢えずライセンスは面倒だから言わねえが分かれよカス!』

「相変わらずの辛辣さだな。それで、内容は?」

『一応、財団中学の戦闘系の個性の奴等は揃ってるなボケども。……『カイン』に『機械仕掛けの神』。『ゼノフォビア』に『完璧な注意散漫』。『悪魔の取引』に『生存権』。『安

眠時計』に『恣意的な指向重力』、『ビルダーベア』に『パッチワークのハートがあるクマ』。こんなところかな。』

『うつへえ。世界を再構築する『機械仕掛けの神』に『生存権』、更にはとんでもない危険度の『ビルダーベア』……やばくね?』

「俺もそう思うよ。」

右の画面で話す男の意見に同意する。

男の名前はティン。個性は『ボール』。SCPとしての名前は『SCP-609 ワンダーティンメント博士の存在的6番ボール』。

俺らの一つ上の世代でトップレベルの個性使いで、今は士傑高校に通っているらしい。

因みに、士傑高校に行ったのは……珍しい事に誰もいない。まあ、基本的に俺らは自由人ばかりだし、士傑高校のようなお堅い高校は嫌っているだろうしな。

『全員が厄介な個性の所有者……しかも、相性がとても良い。』

左の画面ではスーツを着た中年の男がタバコを吸いながら考えている。

彼の名前はブラック。個性は『察知』。SCPとしては『SCP-4869 私たちを見守るもの』。財団中学の国語教師だ。

そして、先生の言うとおりそうなのだ。

『生物の死』である『カイン』に『世界を再構築』の『機械仕掛けの神』、『生物の消失』である『ゼノフォビア』に『意識反らし』の『完璧な注意散漫』、『究極の取引』の『悪魔の取引』に『究極の理不尽』の『生存権』、『ただ眠らせる』だけの『安眠時計』に『緊急事態に強くなる』特性の『恣意的な指向性重力』、『圧倒的なサイコパス』の『キチグマ』に『献身的』な『パッチワークのハートがあるクマ』。……うん、めちやくちや相性が良い。

「取り敢えず、今は静観しましょうか。……こっちから動くのはデメリットが大きすぎる。」

『じゃあ、俺は全校生徒に通達しておく。』

『僕は何時を通りだね。』

『俺は……まあ、タルタロスにアクセスしておくぜカス!』

俺は意見を取り纏め、それぞれが電源を切る。

脱獄したこいつらがどう動くか……それが分からないのがキツいな。

|||||

「では、このように。」

「ええ。これで、よろしいですね。」

「ありがとうございます。義爛さん。こちらも、脱獄した存在なので表舞台には顔を出せ

ないのですよ。」

「それなら、いいところがあるぜ『カイン』。……最近、面白そうな事をしようとしている若い奴がいるんだがよ——」

暴走って怖いよねー!だって、俺は見ているだけだし

「えー、では、今日は救助訓練レスキューを行いに行く。」

翌日、俺たちはバスに乗って移動していた。

レスキュー訓練か……多分、昨日使った場所ではないだろうな。

「おい、藤多あ……そこ代われよ……!」

「断じて断る。」

俺は恨めしそうに話しかけてくる峰田の言葉を首を横に振って拒否する。

俺の右側には葉隠が、左側には百がいるからだろう。

しかも、どっちも俺を挟んで睨みあっているし……どゆこと?

「そういえば、百は昨日のケガは問題ないのか?」

「あ、はい!リカバリーガールさんによって癒してもらいましたし。」

リカバリーガール、確か珍しい回復系の個性で治療能力を高めることで傷を癒すヒー

ローだったな。

俺はまだ直接会話することは無いから分からないが……一応、百を治してもらった礼

を言っておかないといけないかもな。

「そうだ！藤多くんって誰か付き合っている人っているの？」

「……いないな。と言うか、興味がなくて言うのが正解かな？」

「（良かったあ……！）」

「？」

何が良かったのか、なんて聞いたら野暮つてもんだらうな。

「羨ましいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！」

「……騒ぐな。」

「はい……。」

||||||||||||||||

「はじめまして、僕は13号と言います。」

俺らは『USJ』……『嘘の災害や事故ルーム』と言うなんとも当て字っぽいで13

号先生が話し始める。

何でも、様々な事故や災害を想定した訓練が出来る施設らしい。

「では、移動しますか。」

さーて、どんな訓練があるのや——！

「ッー」

「おっと……！」

俺は背後から現れた殺気を感じとり、ナイフを取り出して投擲するが、そのナイフは
いとも容易く弾かれる。

……完全な奇襲だった筈だが……かなりの強者だな。

「やあ!ここにちはヒーローの卵?とヒーローたち!」

茶色っぽい髪に小さな体、頭には熊の耳がついていて、まるでテディベアのような幼
い少女が不釣り合いな鍔を振り回していた。

テディベア、ねえ……。となると……!

「おい、誰だよ!」

「ボク?ボクは熊野尾流太。くまのびるだみんなからは『ビルダーベア』なんて呼ばれているよ?」

俺の行動に気がついた上鳴が声をあげるが、無邪気に笑いながら答える。

きやああああああああああああああああああああああ!何で、何でビルダーベア
がいるの?何で、何で!?アイエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!
「それと、僕はヴィラン何て呼ばれてるよ?」

「ヴ、ヴィラン!」

「隙あり、ですよ!」

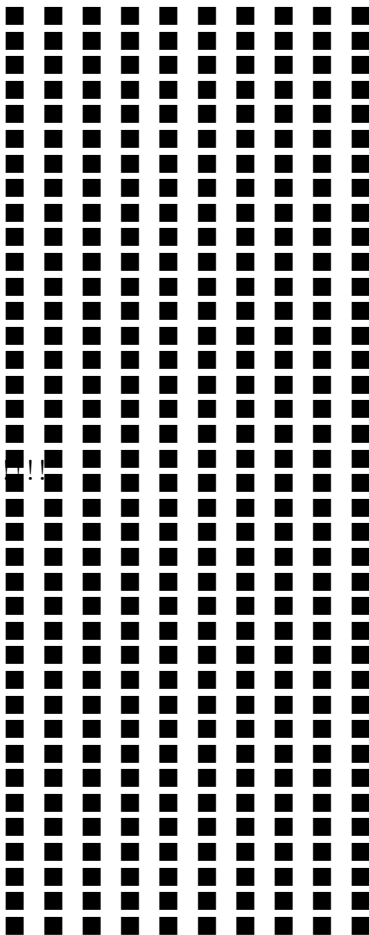
しまつ……この声は『人喰い闇』の……!

|||||

獣が、吠えた。

!!!!!!!

「



体の傷をパッチワークで縫合している内にクソトカゲが一瞬で様々な武器を錬成し、それを雄叫びと共に『アベル』が投げつける。

縫合させている時間はないぜ!

「くっ……!」

「大丈夫ですか!?!」

万事休すだった『ビルダーベア』の前に立体的な黒い影が出現し、剣を消失させる。

………こいつは………。

「おい、肉体の権限を返せ。」

「………分かった。」

「ちっ………!ちゃんと砕いとけよ。」

俺は二人から了承をもらって暴走状態を解除し、落ちてきた鋏を『覇源』の応用で粉碎する。

さて………こいつが出てきたとなると、かなり厄介になりそうだ。

『ビルダーベア』様はアジトに戻っておいて下さい。『カイン』様のご命令です。ここか

らは、私が。」

「ちえー、分かったよ。」

『ビルダーベア』は少し不機嫌になりながら黒霧の中に入っていく。

さて、ここに残ったのは俺と『人喰い闇』だけか。

「お前の個性は通じないぞ。」

「ええ。ですが——！」

黒霧は個性を発動させ、人形の異形を召還する。

……なんだありや。人をベースにしているようだが……。生命的なエネルギーが多すぎる。まるで、パッチワークで無理矢理繋ぎ止めたような、そんな歪な生物だ。

「がああああああおあああああ！」

「………遅い——！」

突っ込んでくる怪物に向けて音速で剣を振るい、身体を切り裂く。

音速で動かせば、真空の刃を造り上げる事ぐらいは出来て当然だろう？

「がああああああおあああああ！」

「っ！ちっ！」

傷ついた身体に向けて更に真空の刃を当てるが一向に止まらない。

後ろに下が——！

「『覇源』——『曇天』！」

る訳ねえだろ！

身体を捻り、音速のエネルギーを剣に伝えて地面に打ち付けた瞬間、爆発したような

「これで、止めです!!」

「しまっ……!」

俺が回転蹴りをした直後に黒霧が靄を伸ばし、俺を覆う。

まさか、これが目的だったのか……!けど、宛が外れたようだな……!俺には『人喰い闇』に対する耐性……まずい!

『覇源』——『千爪』!」

俺はリミッターを更に解除して黒い靄を切り刻むと、爪が全て消失し、夥しい量の血が指や手から吹き出していた。

やっぱり……!俺が十数年前に当てた時よりも濃度が濃い……!となると、『人喰い闇』に対する耐性が……薄かったというのか!?

「まさか、見切られるとは……!」

「濃度を濃くしてダメージを与えたのかよ……!もし、致命傷になりうる部分に当たっていたら確実に死んでいた。」

伸ばした手を引っ込めながら驚愕する黒霧をよそに、俺は一気に突っ込む。

相手が怯んでいるいまなら……!

ドオオオオオオオオオオン!!

「うわっ!」

「なっ……!?!」

突然起きた衝撃で足場が揺れ、体勢を崩してしまふ。

くっ……!?! 今度は何だ!?!

「まさか……脳無が……!?! 不味い!」

「ちっ、逃げんな!!」

明らかに動揺しつつ、ワープして逃げようとしていたところにナイフを投げつけるが、逃げられてしまった。

ちっ……!?! だが、今は他の奴らと合流するのが先決だな。……一度、降りてみよう。

未來に干渉する個性って……はつきり言つて、チート過ぎない？

「よつと。」

それなりの速度で山を下っていく。

合流するのは早い方が良さだろうし……何より、もし『ビルダーベア』のような殺人に特化したSCPの力を持ったヴィランがいれば、犠牲が出てしまう。

パアン！

「……………」

銃声が聞こえた瞬間、左の障害物の影に転がって隠れた瞬間、先程までいた場所の足元を弾丸が撃ち込まれる。

……銃を持った奴がいたのか……！ただの拳銃なら俺の肌を通すことはない。が……警戒に越したことはないな。

「……流石、と言うべきか。」

「……誰だ、てめえ。」

「……『バレット』と呼ばれるヴィランだ。黒霧殿にここの殿を任された者だ。」

頭を障害物から出し、相手を視認しながら一挙手一投足を警戒する。

女の姿は……ありふれた警官のような服装をしている俺らよりも数歳年上の顔立ちが整った若い女で手には六発入るリボルバライフルを持っている。

バレット……『弾丸』か。俺や切島のような肌が頑丈な奴には効かないだろうが、普通なら厄介極まりない相手のような気がする。

「それにしても、私の『無音の銃声』を避けるとは……見事だよ。」

「……無音? 音は出ていたぞ?」

「ああ、それなら……既に撃つたよ。」

「がっ!」

突如銃声がしたと思った瞬間、頭から血が流れる。

バカな……! 『バレット』は銃を構えていなかったぞ!?! なのに、何で撃たれているんだ!?

「ちっ……!」

「予想出来ているよ。」

「いふっ!」

再び頭を障害物に隠した瞬間、銃声が聞こえ、足に銃弾が撃ち込まれる。

物質的に防げない弾丸か……! しかも、俺の肌を撃ち抜くか……!」

俺の肌は普通の銃弾なら弾く程の硬度を誇る。なのに、あいつの銃弾は俺の肌を撃ち抜く。……しかも、俺の行動は読まれている。

……読まれている？なら、これで分かる筈だ……！

「予想出来ているよ。」

「くっ！」

障害物を腕力で投げ飛ばすが、弾丸が銃声と共に俺の胸を貫き、肺を穿つ。

やっぱりだ……！こいつの個性は……！

「未来予測……、そして時間を越える銃か……！」

「……よく分かったね。私の個性は『未来』、そして『タイムマシンリボルバー』。……分かるでしょう？貴方の個性では、勝てない。」

俺は傷を癒しながら『バレット』の個性を暴き、『バレット』そのようすを見て感心する。

『未来』……未来を予測できるSCPは多いからこの際は除外する。だが、もう一つの方は厄介極まりない。『タイムマシンリボルバー』……正式なライセンスは『SCP-710-jp』。『今』撃った弾丸を『過去』と『未来』に送ることができる時間の不可逆性を利用した銃……！

その特性を生かせば……阻止できない殺人を起こすことも可能な個性だ。

しかも、未来を予測出来るとなると更に危険性が高まる。

このSCPは未来を予測できる個性ではない。故に、未来に撃つたらどうなるか撃つた本人は分からない。だが、未来を予測出来るとなると……俺のようになるのか……！

「葉秋君！助けを読んできたよ！」

「予想外……！」

「来るんじゃないっ！」

応援の先生を連れてきた葉隠に向け、銃を向けた瞬間、俺は走り出す。

誰かを助けられなくて……何がヒーローだ！俺は普通のヒーローにはなれない。何せ、『正義の味方』なんて……『クソトカゲ』である俺には許されない未来だから。なら、『誰かの味方』……大切な奴らを守るヒーローになる！

あの日、そう誓った！

その誓いを守れなくて……ヒーロー以前に、人以前に、化け物として許される訳がない!!!

「がふっ!!」

「えっ……？葉秋君!？」

「葉秋君!!」

「スナイプ……銃使いのヒーローか。厄介以上に憎たらしい……！けど、一人戦闘不能

に出来たから問題ないだろう。」

銃声と共に弾丸は葉隠を庇った俺の心臓を的確に射ぬき、俺は倒れこむ。
くっ……起きれない……。無念……！

事情聴取って必要だけどされている人にとって結構負担
大きいよね

「くっ……。」

俺は目を開けて起き上がる。

ちっ……完全に気絶してしまった……。けど、葉隠やスナイプ先生が来ていたからこ
こは恐らく保健室か。

「よかつたああああああああああ！」

「っ……！葉隠か……！無事だったか……！」

泣きじやくりながら飛び付いてくる葉隠を避けれずに抱きつかれる。

……この様子なら特にダメーヅが入っている様子は無さそうだ。

「お兄ちゃん……大丈夫だった？」

「緋鳥……ああ、問題ない。体の方の傷も完全に癒えきった」

「ならいい」

扉の前で佇んでいた緋鳥は俺の様子を見て扉を開けてどこか行く。

……あいつ、何だ？この歳になって反抗期か？

「緋鳥ちゃん、葉秋君が起きるまでずっと泣きそうな顔をして保健室をうろうろしていたんだよ?」

「……そうか」

あいつもあいつなりに心配していた、と言うことか。

「全く……あんたも早く来なさいよ!」

「す、すみません……」

奥の方からちっさいおばあさんとオールマイト、あと……緋鳥と出会った時の刑事がやって来た。

おおよそ、事情聴取か……?」

「葉隠、保健室から出ておいてくれ。多分、事情を聞かれる」

「うん、分かった!」

元気に葉隠は保健室から出ていき、俺と先生たちだけが保健室内に残った。

「取り敢えず、今日は事件について幾つか聞きたいことがあるけど……いいかな?」

「ああ、構わない。」

=====

「……どうだった『バレット』。彼は良い人材だったかい?」

「かなり良い人材かと」

私は暗い部屋の中で一人の男の前に立つ。

この男は私が所属する数名のメンバーで構成される組織のトップに位置する男、私の個性では……死なない。曰く、あの男は概念そのものが個性という話を『シャイ』に聞いたことがある。

「それで……彼を組織に引き込むことは可能かい？」

「……難しいかと。」

少し考えた後、答える。

条件さえあれば恐らく、引き込める……けど、その過程で確実に暴走する。そうなれば組織に入る前に世界が滅びかねない。

いくら私でも、自分の命は大切だからね。

「まあ、他にも組織に入りそうな人をピックアップしてもらった。良い人材なら……引き抜け。」

「……分かりました。」

紙資料を見ながら答える。

『ビルダーベア』や『妖狐変化』、『校外学習』、『小さな魔女』、『おお、こわいこわい』、『カイン』、『生存権』、『禁忌』……かなりの数がいますね……。

これをピックアップした協力者……一体誰でしょうか。そこが特に気になります。
……時間を見て、探して見ましょうか……。

疑問提起、幾らなんでも反則レベルの相手に何も考えずに突っ込むのは無謀!

「……さて、どうしようか。」

翌日、校内にヴィランが出たことよって休校となったため、家の中で筋トレをしながら今日の予定を考える。

緋鳥はクミホたちと街に行ってしまったし……百——面倒だからクラスで言われているヤオモモでいいか——とは趣味が合わないし……どうしよう。

「……取り敢えず、昨日の事件について整理しておくか。」

ぶら下がっていた鉄棒から降りて、パソコンを立ち上げてファイルを開いて書き込んでいく。

……あれ?

「おっかしいな……。」

「葉秋さん、お茶が入りましたわ。」

「おう、ありがとう。」

疑問な所を見つけた時、扉を開けて紅茶を持ったヤオモモが入ってきた。

ヤオモモも怪我していなく良かったよ。

「何をしているのですか？」

「昨日の事件を纏めていた。……そしたら幾つか、不信な点が出てきたんだよ。」

「不信な点……？それは一体何ですか？」

「まず『バレット』の攻撃。これは何で俺にダメージが入ったんだ？」

バレットの個性『タイムマシンリボルバー』はあくまで弾丸を過去や未来に飛ばす個性だ。その銃弾はありふれた銃弾の筈だ。それなのに、俺の体にダメージが入っている。おかしくないか？

「次に『ビルダーベア』の殺人。あいつは味方を殺していた。それは何故だ？」

「た、確かに……。普通なら味方を殺す必要がありませんし……。言われてみれば確かに……。」

まあ、あのキチグマの事だし殺人に理由なんて無いだろうけど……。そのバックについている『カイン』がそれを許さない筈だ。恐らく、カインたち『脱獄囚』と今回の主犯格である『ヴィラン連合』は協力関係にあるのだろう。

なのに、殺した。これはおかしい事ではないか？

「そして最後……。何故『ビルダーベア』だけなんだ？」

「葉秋さんは他にも仲間がいると思っっているのですか？」

「とある情報筋の話なんだが、秘密にしてくれるか?」

「構いませんが。」

「実は、『ビルダーベア』は……タルタロスからの脱獄囚の一人なんだ。」

「そ、そうでしたの!?!」

「やっぱり、『ビルダーベア』が脱獄囚だとは知られていないのか。」

「その情報筋からの話なら『ビルダーベア』以外にも脱獄囚がいるらしい。その中に無力化に特化した奴がいるんだが……そいつが『ビルダーベア』と一緒に来れば俺たちは全滅していた。」

「……………」

「そんな強力な駒があるのに……何故出さなかったのか、これが最後の謎だ。」

「ファイルに書き込んで内容を保存し、ヤオモモが淹れた紅茶を飲む。」

「うん、普通に美味しい。香りもいい。」

「そうだ! お父様が貰った菓子があります! 持ってきましたよ。」

「……………」

「紅茶にあう菓子を持ってくるために扉を開けて出ていくヤオモモを見て安心する。」

「良かった……気づいていないようだな。」

「いい加減出てこいよ……『ゼノフォビア』」

ベッドの影に話しかけた瞬間、二本のナイフが投擲された爪で弾き飛ばす。
やれやれ……手厚い歓迎だな。

「……何時から気がついていた。」

「俺が『バレット』の疑問をヤオモモに話しかけていた時だ。」

影から出てきたセーラー服を着た高校生くらいの少女を見て席から立ち上がって拳を構える。

……『ゼノフォビア』。それは正体不明の財団職員のみ而降りかかる現象。職員は現象の擬人化と言う方法で封印したが……恐らく、この世界での『ゼノフォビア』は認知では倒せないだろう。

何せ、『ゼノフォビア』の異常性と擬人化を知っている俺の前に出ている訳だからな。

「それで、何の用だ。まさか……何も考えていない、なんて言わないだろう？」

「何、簡単なことよ……。」

一呼吸置いた『ゼノフォビア』は俺の予想を越える言葉を言いはなった。

「私たち……『ヴィラン連合』の仲間になりなさい、『アベル』。」

ヴィランって全部が全部、悪人という訳ではない。当たり前的事だよ

「……はい？」

『ゼノフォビア』の言葉について啞然としてしまう。

俺が……ヴィラン連合に入れ……だと？

「ふざけているのか、お前は。」

「ふざけている訳ではない。私はとある人物から要請されているだけに過ぎないのだから。」

「……バックにいるのは誰だ。ヴィラン連合やお前らのような凶悪犯を従わせる程の力を持つ奴なんて限られているはずだ。」

「さあね。それに、私はヴィラン連合に入っているのはとある存在を探すため。」

互いに警戒を解かず、互いの腹の内の探りあう。

こいつは……敵対させない方が得策だろう。こいつの個性が『ゼノフォビア』である以上、一定以下の光の室内だったら何処にでも出現できる特性がある。となれば、防御不可能だろう。

「何の目的でヴィラン連合に入っている。」

「……逆に聞こう。何故、貴様はヒーローに憧れている。貴様の本質は『悪意』。人類を憎悪する悪意その物だ。それなのに、何故ヒーローになろうとしている。」

「愚問だな。俺は緋鳥を守る為にヒーローになろうとしているだけだ。」

「質問の答えになっていない。」

「……本当に簡単な話さ。俺は藤多葉秋だ。クソトカゲやアベルとは違う。それだけの話だ。」

「成る程な。私としても緋鳥と敵対すればメリットよりもデメリットの方が大きい。あれは一種の災害その物だ。」

「……やはり、緋鳥の個性を知っているのか。俺はそもそも死なないから『認識の鳥』が食うことが出来ないが……恐らく、『認識の鳥』は認識系……『ゼノフォビア』のような人の形をした『認識』には干渉出来ないのだろう。」

「それで、俺の質問に答えて貰おうか。」

「……今回の事件、その黒幕を操っている別の組織のトップがいる。私はそいつを倒すためにヴィラン連合に協力しているだけに過ぎない。」

「成る程ねえ……。けど、何故そいつを追っている。」

「私は、そいつの仲間の一人……『僧正』という老人に家族を皆殺しにされた。その復讐

の為に生きている。」

こいつは……『ゼノフォビア』は家族を殺した『僧正』と呼ばれるヴィランを殺す為にそのヴィランが所属しているであろう組織のトップを殺そうとしているのか。

ヴィランを憎悪しながらヴィランに堕ちた少女……それが『ゼノフォビア』の正体か。「けど、その組織について何か知っているのか？」

「……いや、全くと言うほど全容が分からない。ただ、そのトップが私たちと同系統の個性持ちを集めている事が分かっている。ブレインの『カイン』に誘いの手紙が来たからそこが分かっている。」

『ゼノフォビア』がお手上げのジエスチャーをする。

……SCP系統の個性持ちを集めている……？つまり、そのトップもSCP系統の個性持ちか。多分、『タイムマシンリボルバー』も集められたSCP系統の個性持ちだろうな。

それに、それを把握するためにはその情報を持った諜報員が必要になる。……どこかにいるのか、SCP系統の個性持ちの情報を流出させている存在が。

『カイン』はどう返答している。」

『興味ない』。それだけよ。」

成る程な。忌々しい事だが、あの『カイン』がそつちにつかなくて助かる。

「連合には入らない。だが、その組織については情報共有する。これが最終的なまとめかな。」

「……まあ、そうなるかな。それでは、私はここで失礼する。」

札をした『ゼノフォビア』は影の中に沈んでいく。

さて……情報の整理でもしようかな……。

ピロリン♪

「ん……？誰かからメールでも来たのかな？」

俺はポケットにしまっていたスマホの電源をつける。

『葉秋君！午後から町に遊びに行かない？峰田君に上鳴君、切島君、耳郎ちゃん、芦戸ちゃんも呼んでいるから暇だったら来てみて！場所は——』

……葉隠からのメールか。……これから情報整理でもしようかと思っていたが……気が変わった。ちよつと出かけよう。

天才って言うのは産まれてからずっと運命に愛されている存在だと、俺は言いたい

「……ふう。」

「あ、葉秋君！」

「よお葉秋！」

「よお、葉隠に上鳴。」

駅前でスマホをいじっていると葉隠と上鳴がやってきた。

二人ともそれなりにファクションしているようだ。……一切興味の欠片もないけど。

「昨日はごめんね。私を庇って傷つけちゃって……。」

「別に構わない。俺にとつては数秒あれば治る傷だからな。」

「つーかよ……葉秋が戦っていたヴィラン、葉秋を倒す程強いのか？」

「……あいつは時間の不可逆性を利用している。それ故に絶対に防げない。俺のようなそもそも死なない奴でもなければ普通に、あっさりと殺される。」

「ひえー……。そんなヴィランがいたのかよ……。俺もヴィランに人質にされちゃった

けどそれの方が絶対にマシだよ。」

「……何やっているんだ、お前は。」

「オツス。葉秋に上鳴、葉隠。」

「こんにちはー！」

「こんにちは。」

「楽しそうだなおい！」

三人で昨日の事を話していると、切島、芦戸、耳朗、峰田がやってきた。

俺はこの後遊ぶとしか言われていないから何をやるのやらさっぱり分からない。

「それじゃあ……みんなでゲーセン行こー！」

|||||

「よしっ！勝てた！」

「ちくしょー！また負けた！」

耳朗は静かに手を握りしめて喜び、峰田は崩れ落ち、地面に拳を打ち付ける。

耳朗が某太鼓のゲームの二人プレイでやる事を提案し、そこに面白がった葉隠が『耳朗ちゃんに勝つたら好きな人に一つだけ命令できる。』という賭けを始めたのだ。

いま崩れ落ちた峰田は『芦戸の胸を揉む』と言う邪な願いでやって、今ので十連敗である。

全く……耳朗はミュージシャンの家庭だ。そう言うこともあつて音感、リズム感覚はかなり高い。それを攻略出来るのはかなり難しい。

「葉秋はやらないのか？」

「……上鳴は何を願うつもりだ？」

「そりや、葉秋に『ナンパさせる事』だよ。お前、見た目はかなりレベルが高いんだし、ぜつてえナンパ成功するつて。そして、その女の子を俺が……！」

「……バカだろ。」

「あー！負けたー！」

「ふん。どんなものよー！」

上鳴と話していると葉隠が耳朗に大差で負けた。

……芦戸は峰田を連れてどこかいったし、切島は『あし〇のジョー』のようにベンチに座つて燃え尽きているし、上鳴だと俺にも被害が飛んで来る。

……仕方ない、やるか。

「……俺がやる。」

「ふーん。で、何を選曲するの？」

正直、この手のゲームには触ったことが無いから……。適当にオリジナルのこれにしよつと。

難易度は……適当に左端の『鬼』と書かれている物にしよう。

「ちよつ、これつて一番難しいやつ……。」

「まあ、そんなことを気にするな！」

さて、やりましょうか。

運命に嫌われているとき……本当に貧乏くじばかり引く
ことになるよ。ヤレヤレだぜ

ダダダダダダダダン!!

「……………」

「……………」

いやー、まさかこんな結果になるとは……。

『フルコンボだドン!』

「勝ったああああああああー!」

「う、嘘でしょ……………」

俺は勝利の雄叫びを漏れだし、耳朗は床にへたれてしまった。

まさか……俺が勝てるとは。

いや、よくよく考えてみれば、この結果になりやすいのか。

俺はリズム感でやるのではなく、純粹に目で流れてくる物を押しているにすぎない。

つまり、正確にはリズム感ではなく、高い動体視力とそれに対応できる反射神経で行っていたのだ。

まあ、最後の方でこっちに敵意を向けていたヤツがいたから、集中出来なくて失敗しかけたけど……まあ、良いだろう。

「それで、何か願いでもあるの？」

「うーん、そうだなあ……。」

耳朗に聞かれて少し考え込むふりをする。

まあ、考え込む必要もないし、あいつが接触してくるとなると、戦闘になった時に俺よりも他の奴らに迷惑がかかってしまう。

穩便に済ませておきたいが……

ダァン！

「まあ、そんな事はあり得ない、か。」

至近距離から撃たれた弾丸を額に当たる直前に掌で受け止める。

こいつなら、どう動くか……それくらいなら、一度しかあつたことがないが、予想出来る。

「……取り敢えず、全員を連れて逃げろ。」

「わ、分かった！」

パニック状態になりかけていた人たちを耳朗たちが連れて逃げていく。

そりゃ拳銃を見ていないから拳銃ヒステリーにならないが、それでも突然の銃声には

誰だってびっくりするだろうな。

「……何の要件だ、『バレット』。」

「いやはや……まさか、さっきのを止められるとは……予想外でしたね。」

何故か若干ボロボロになった服を着ている『バレット』が近くの角から出てきた。

こいつ、何でここまでボロボロになっているんだ？こいつの個性の特性上、普通の戦闘ならダメージすら入れられない筈だ。

「何故、そこまでボロボロになっている。」

「いやはや、『妖狐変化』に接触したのは良かったけど……手痛く追い返されました。」

そりやそうだろ。クミホの個性はその特性上人間相手なら勝ち目が無い。こいつの『タイムマシンリボルバー』がいくら強力でも、破壊しようとするればおぞましい程の危険な個性だ、手は出せなかったのだろう。

「……他には手を出していないようだな。」

「ええ。あの二人の個性は私の力では手に余る、とボスから言われていますので。」

……そのボスって奴が、『ゼノフォビア』が追っている奴かも知れない。が……

「それで、俺に何の用だ。」

「簡単な事ですよ。……デモンストレーションです。」

「っ!!」

突然、俺の体は殴り飛ばされ、後方に飛ぶ。

なっ……!?!

「中々良いのが入ったね。」

「……ちっ、俺も混ぜてくれよ。」

「そんな事、別にどうでも良い。美味しければ。」

破壊されてできた下の階に続く穴から茶髪のカギ、ダンディな宇宙服を着た男、少し大人びたハムスターのような耳がついた少女が出てきた。

……ガキの近くには謎のスコ○タンドみたいなのがいるから、恐らく『SCP-204 保護者』。宇宙服は色々の種類があるから把握不可能。ハムスターは……最悪の場合『SCP-1616カリカリくん』の可能性があるから要警戒。

「彼らの相手をしてくれないかな?」

「……ちっ、こりや嵌められた……!」

襲いかかってくるこいつら……絶対にめんどくせえ……!

SCPの奴ら、耐久力化け物かよ!?人の事を言えないけど!

「はあ!」

「せい!」

俺の拳と宇宙服の男の拳がぶつかり合い、辺りに凄まじい衝撃波を撒き散らす。

こいつ……! 純粋なパワーだけなら俺にも匹敵する……!

「行つて!」

「はあ……む!」

保護者の拳をギリギリのところまで避けたが、肩の筋肉と骨がハムスターに喰われてしまふ。

くっ……! こいつらを外に出せば周りへの被害が極めて大きくなる高い。更に言えばこいつらに勝てる、もしくは捕縛できるヒーローが到着するまでにこいつらを取り逃がす可能性がある以上こいつらをこの店内に居させる必要がある。

耐えられるか……? いや、耐えてみせる!!

『『覇源』——『激流』!』

「なっ!？」

隻腕となった俺に襲い掛かってきた宇宙服の男の拳を片手で掴み、そのエネルギーを体全体で独楽のように回し、地面に叩きつける。

「がっ……!？」

「食らえー!」

「はあ……むー!」

『緊急ボックス!』

宇宙服の男を無視して攻撃してくる保護者の攻撃を安心と安定のボックスで防ぎ、その隙に近くにあったエスカレーターから飛び降りる。

やっぱりハムスターの方は『カリカリくん』かよ……! あいつはあいつで K a t e r の中でも特級クラスにやべえ奴だ。それに、ルナティックも保護者も純粋なパワー型、しかもパワーなら俺にも匹敵する。

仕方ない……。本気ガチの一撃を入れてやる。そしたらさっさと帰れ!

「ふう……。」

「何処に逃げる。」

「無駄だよー!」

「食べさせて。」

「っ！皆さん避けて下さい！」

叫んだ所でもう遅い……………!

ダブルトルネード

『二重螺旋』!!」

三人が着地する瞬間、俺の両腕が地面に当たり、凄まじい衝撃波と共に全員を吹き飛ばす。

全身の間接駆動によって産み出された螺旋のエネルギーを間接毎に強化していき、地面に触れた瞬間その全てを放出する俺の必殺技『絶技』の一つだ。

俺の必殺技『絶技』はリミッター解除によってもたらされる身体能力を生かした『覇源』と体のエネルギーを使う『螺旋』。更に今は秘密としている『終極』がある。

その大半が俺でしか出来ない反則級の破壊力を持つ。二重螺旋は其中でも珍しい殺傷能力の無い『螺旋』なのだ。

「見事です。では、帰らせてもらいます。」

「は、ちよっ」

「まっ……………」

「まだ食べ終え」

二重螺旋の衝撃を物ともしない『パレット』が指を弾いた瞬間、全員の姿が消えてなくなってしまう。

ちっ……！敵には転移系の個性の使い手がいやがる。SCP系統の個性を持つ奴らばかりを狙うか組織か……。こいつらの相手もしくちやならないとか、かなり面倒だぞ……。

「ん……？」

こんな紙、あつたつけ。拾って読んでみよ。

『ゼロ』

ゼロ……何もかもが終わり、けど何かが始まる、そういつた意味で使われているのか？

だが……これは恐らく組織の名前か。機動隊も入ってきたし、この後の事情聴取の時に教えとこつと。

宣戦布告は相手を考えよう。って言っても、敵も対人特化だけど

「あ、ああああ……。」

疲れた……。

次の日、俺は机に寝そべりながら唸り声をあげていた。

事情聴取の時間がアホみたいに長い。最初は普通の刑事だったのに、警視、署長とどんどん階級が上がって最後の人なんかは国防大臣だよ。そのせいで学校に来る直前までずっと事情聴取だったよ。

ちなみに、『ゼロ』と言う組織は国防レベルでヤバイ国際的な秘密結社で個人で国家を滅ぼせる程の力があるらしい。

(そりやそうだ。あいつらは全員がSCP系統の個性持ちだからな。)

俺の『クソトカゲ』や緋鳥の『緋色の鳥』何かの個性は国家どころか世界そのものを破壊する事が出来る個性だから、その縮小版はそれなりにいるだろう。

ちなみに、中学の奴らにも普通に世界がヤバイ(糞語彙力)がいるからそこまで気にしてはいない(オイ)。無論、もし暴走したら俺でも止めれるかは分からない。

「葉秋君、お疲れだね！」

「当たり前だ。」

眠そうにあくびをしていると、葉隠が話しかけてきた。

……よくよく考えてみると、俺はよく葉隠と一緒にいるよな。飯を食うときは違うけど。

「つーか、昨日は疲れた。」

「ははは、つてそろそろ相澤先生が来るね。」

葉隠は時間を確認して席に座ったとたん、相澤先生が入ってきた。

……て、結構怪我しているな（鉄心）。

「えー、体育祭があります。」

「「「学校つばいのきたあああああああああああああああ
!!!!」」」

先生の発表に大歓喜。やっぱ凄いな、雄英（再確認）。

|||||

「やっと始まるね、体育祭！」

「……そうだな。」

俺は珍しく昼食を葉隠と一緒に食べながら体育祭について話していた。

雄英体育祭とは、個性ありの体育祭でかつてのオリンピッククに代わって色んな人たち

を歓喜させている。更に、俺たちはこの体育祭を見に来たヒーローたちにアピールすることですカウトに有利に出来る。

「ただ、今回の体育祭は俺たちヒーロー科が確実に勝てる訳ではないがな。」

「……え？どうして？」

「俺と同じ中学の奴らも雄英に入っているんだよ。」

俺らSCP系統の個性は基本が反則レベルのチート。クミホ何かは俺でも勝てるかどうか分からない。あいつの特性は精神操作だから、純粋な物理型のSCPである俺とは相性が最悪レベルで悪い。

「それがどうかしたの？」

「あいつらの個性は俺と同族異種。基本的にデメリットがない。そもそも、既存の法則に縛られていない。」

「へ……？」

「まあ、全員が戦闘向けと言うわけではないから問題ないが……。」

啞然とする葉隠を尻目にカレーライスを食べる。うん、美味しい。

|||||

「……で、なにこれ。」

授業が終わって帰ろうとしたら何故か普通科の奴らがいた。

えー……面倒ごとじゃん。みんな険悪ムードだし。

「あ、葉秋。」

「久しぶり……なのかな、クミホ。」

いつも通りのクミホを見て若干安心する。

クミホは険悪ムードが出ていない。こいつの事だからお目付け役、若しくはノリで着いてきた、と言うところだろう。

事実、雄英に来た中学時代の奴らはクミホ以外にいないし。

「そう言えば、緋鳥は出るのか体育祭。」

「あー、出ないってよ。」

まあ、出て個性発動してしまつたら一瞬で世界終焉シナリオ(クソザコトカゲ理論)だよ。

「それで、こいつらは何でここに来たんだ？俺はさっさと帰って眠りたいのだが。」

「……俺が話す。」

クミホとの話しを遮ってきたのは薄紫の髪の青年だった。

うーん、肉体に異常性はなく、体を鍛えている訳ではなさそう、多分クミホと同じ精神系統の個性か。

「あー、その前に……クミホ、操ってくれ。」

「……………」

「分かった。済まないね心操。」

俺の言葉に唾然とする心操はクミホによつて強制的に精神を操られる。

よし、これでこいつの個性は使う事ができなくなった（外道）。

「ひ、ひでえ……………」

「用心深過ぎる……………」

そりゃ、俺唯一の弱点ともいっていい精神系統の個性だぞ？警戒心はマツハで上がっているよ。

「それじゃ、何で来たか話してくれ。」

「宣戦布告だ。」

その後、その心操の話を聞いて少しイライラしてきた。

英雄も英雄で酷な事をしてくるね。俺らヒーロー科とそれ以外の科では戦闘能力に絶望的な差がある。それを攻略出来る奴しかヒーローになれない、という事なのかもしれないが普通に考えれば無理ゲーだと思う。

「……………まあいい。それでも俺たちが勝つ。それと、話に割り込もうとしたBクラス、そしてAクラス。」

「ああ!？」

「……どうかしたのか。」

「……普通科や経営科には注意しろよ？何せ——」

俺が教室から出るついでに少し警戒を促す。

「俺を殺そうと思えば殺せる奴がここにいるからな。」

「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

!!!!!!??